

海斗とアタシと、ミナミの中心街。
完全版

七瀬 佑衣
nanase yui





過ぎた分だけ
求めるものも多くて

出逢いを求めたことも
二人で生きることも

何のためにあるのかとか
何かを信じていたかったことや

そのすべては
毎日のアタシたちであるということに
誰が知るようになったんだろう

この街から見えるもの。

忙しい街並みの風景。

誰かは必ず笑う街。

一度は夢を見て、この街を出たかった。

だけど、いつも元気に人は笑って。

おもしろいことはないかと常に考えていて。

そこから生まれるものは、どこかへ行きたがる思いじゃなく。

ホントは、この街から出たいのではなく。

この街が一番好きだったんだ。

だから、いつもここからいろんなものを考えていった。

出逢うものは翳りなく人を想った。

だから、アタシはこの街に住むみんなが大好きだった。

いつも遊びに行く場所は決まっていた。

そこでの出逢いは、何かしら少し怖い気分でもあった。

だけど、みんなが溢れ返るその人波が、なぜかドキドキして。

出逢いなんて、ホントはなかった。

だけど、ホントの出逢いなんてここにはないと言ったらそれでも通用したかもしれない。

アタシが出逢う、ほんの一握りでしかないその人たちは。

この場所にとっては、ただ同じ気持ちを共有する、それでいて同じ時間を共に共感できる、唯一の仲間たちだったのかもしれない。

ホントは、そこまで考えていなかった。

そこまで、その場所にアタシが馴染んでいたのかはわからない。

だけど、ただその場限りの想いはそこにあってもいいと思えた空間だったから。

もしも、ホントの想いを知ったとしたら、アタシはもうそんな気持ちでこの場所へは訪れないだろう。

ホントは、街の雰囲気が好き。

だけど、この場所にいる人たちの感覚は、どこことなくアタシとは違っていて。

だからこそ、ホントのことを言えば、この場所をおもしろいと感じていて。

だからこそ、出逢う人との関係を、ある一定の距離に保つことで、自分を考えていられた。

ホントは、そのノリについていけない。

もっと、静かな空間で過ごしてもいいかなと思えた頃。

海斗に出逢った。

一見、物静かだった。

でも、話し出すと止まらなくて。

どことなく、いつも一緒にいた人たちと海斗を、同じ感覚で覚えていた。

何だか無防備で、何も考えていないような感じ。

だけど、ホントはちゃんとした考えを持っていたりして。

どれが海斗なのかわからなかった。

だからこそ、アタシは言えたのかもしれない。

”海斗は、本気で人を愛したことある？”

ジッとアタシを見据えて言った海斗の言葉は、次の瞬間その笑顔と一緒にアタシをわからなくしてしまった。

”それって、人愛したことない人の言い分ちゃうの？おまえが言うんやったら、オレが本気で愛してもええよ”

馴染めない。

やっぱり、海斗は他の人と同じなのかな。

アタシはもっと海斗を知りたかった。

そんな人じゃないって思いたかった。

本気の意味がわからなくて、そんな簡単に口にした海斗を何だか心から信じることができずにいた。

”海斗は、いつも何考えてる？”

”優里のことで頭がいっぱい”

”なんでそこまで言うの？”

”オレが心から愛するかもしれん人やから”

言葉はどこで感じるんだろう。

ホントの言葉なんて、ここにはないのかもしれないのに。

この街には、海斗が溢れ返ってる。

だから、アタシはまだこの街にいられるのかな。

土曜日の朝。

「優里、ミナミ行こ」

土曜日の朝、海斗がマンションにやってきてそう言った。

まだ起きたばかりのアタシにとっては、その言葉がまるで遠い街を思わせてしまえるかのような、そんな感覚だった。

「うん、いいけど……」

「……なんや、浮かん顔して。はよ支度してや」

「今日は晴れてる？」

「うん、快晴。まるで、オレの心みたいや」

満足そうに微笑む海斗を、少し訝しげに見てしまった。

海斗の表情が晴れやかなのを、まるで少し腑に落ちない人が考えるみたいに。

「たこ焼き、食べたい」

「ええから、はよして」

「唐揚げも」

「なんやねん」

「お腹すいた」

「わかったから、ええ加減メイクしたら？おまえ、いつもそうやな。いつもボンヤリさんで困るわ、ほんま」

海斗はそう言いながら、少し微笑んだ。

何となく、アタシはその想いにふけてしまえた。

何となく、だけど。

人を想うって、こんなことなのかなって。

メイクはそれほど時間を費やさない。

いつも同じメイク法で、飽きることなく短時間で済ませていけた。

こだわりがないと言えば、そうなのかもしれない。

海斗が見てくれたら、それでよかった。

「そんなん言うてもええの？オレ、本気にするよ」

そう言って、海斗は笑う。

海斗の言葉が。

海斗の仕草が。

海斗の考え方が。

すべてがアタシの中で、形になっていく。

海斗は知らないんだろうね。

いろんな想いが、ここにあるってこと。

海斗は、今何を想ってる？

今日は、どんな気持ちを抱くのかな。

アタシはこのままの気持ちで、海斗を想っていてもいい？

海斗はどんな言葉を口にするだろう。

”ええから、もうはよしてや”

そんないつもの声が聞こえてきそうだった。

道頓堀。

道頓堀のグリコマークが、いつもの見慣れた風景だった。

通り過ぎるたびに、人の多さに少し気が滅入った。

たまに、ここでたこ焼きを食べる。

いろんなたこ焼き屋さんがあるけど、いつもの食べ慣れたお店のものが一番のお気に入りだった。

「人が多いな」

ふいに、たこ焼きをモグモグしながら、海斗が口を挟んだ。

目深にかぶった帽子の間から、海斗の澄んだ瞳が見える。

はにかんでいた。

「美味しい？」

アタシの言葉に、海斗が一瞬間を置いた。

「.....なんや、美味しいわ」

「.....なんや、機嫌悪.....」

「そういえばや、神戸の街はどうやった？」

先週、友達と行った神戸の南京町の話だった。

「美味しかった」

「おまえ、食べ放題やな。太るよ」

「そんなに食べてへんから大丈夫や」

「今から六甲行こや」

「.....ほんまに？」

「ひさびさ。冬が一番ええんやけどな」

行く気満々の様子で、海斗が1つたこ焼きを口に放り込んだ。

微笑みながら、モグモグを繰り返す。

幸せそう。

「そんなに美味しい？」

「.....なんや、うるさいな」

目も合わせずに、海斗が人通りを垣間見ながらそう答えた。

海斗のスコ。

スカルマークの長Tとシルバークロスアクセのバランスが、今日はちょうどよく見える。

「今、何時？」

チラッとアタシを見ると、海斗がそう尋ねた。

5時を少し回っていた。

「どっか行くところある？」

「パークス行きたい」

「行って何すんねん」

「雑貨見たい」

「また？」

「欲しいの見つけたから」

「オレ、犬見たい」

少しはにかみながら、案外乗り気になってきた。

犬は飼ってもいいマンションなのに、なぜか海斗の家ではまだ飼えないでいる。

先月、海斗と一緒にペットショップへ行った時、アタシが猫を飼おうか躊躇していた。

スコのふんわかした仔猫だった。

「かわいいなあ、おまえ。どないしたん？」

思わず、ほころび過ぎの笑顔に、アタシはなんだかとても幸せだった。

「ほころび過ぎや」

ボソッと呟いたアタシの言葉に、海斗が少年のように笑顔を向けた。

「何がや。見てんや、この子。可愛らしいやろ。おまえ、飼えや。オレ、毎日見にくるわ」

「飼いたいけど、ちょっと迷う」

「何で？」

「だって、ペット飼ったことないもん。お世話できんかもしれんわ」

「何がや、オレが世話するから、飼ってみろよ」

「嘘やろ、できんわ」

「飼えや。この仔がおまえのうちにいくまで、オレここから動かんよ」

「.....飼えんで、アタシ」

「.....おまえ、無情やなあ。飼ってって言うてんやろ」

「嫌や」

「ほな、オレ飼うわ」

「.....ほんま？」

「うん、もうオレの仔」

両手に抱えられたスコが、何だかとても幸せそうにしていた。

「ミャ〜」と1回、鳴いた。

店員さんと楽しそうに会話している海斗が、何だか少しいつもと違う海斗に見えた。

この仔は、どんな名前になるんだろう。

キャラメルマキアート。

「スタバ行こや」

人通りの合間を縫って、両手をポケットに入れながら歩く海斗が喧騒高らかないくつかの店先を眺めながらポツリと呟く。

海斗の表情に、少し気だるさが漂っていた。

この顔が、少しこわいと思えた。

アタシにとって、海斗は一番の近い存在だった。

時折見せるそんな表情を見ると、いつも少しだけ遠くに感じてしまっていた。

そんな時は、いつも海斗の存在を意識した。

海斗というアタシを、意識していた。

「……なんや、何か言えよ」

「何のこと？」

「スタバ行こうって言うてんねやろ、オレが」

「……ああ、うん」

「冷めてんなあ」

そう言って、少しはにかんだ。

いつもの距離感に戻って、少しホッとした。

「海斗よりマシやと思うわ」

「オレは違うねん。並ぶなよ、おまえ」

「並んでもないし」

「どこにおんねん、おまえ」

「どこでもええよ」

「お前が何やっちゅうねん」

「何のこと？」

「知るかっちゅうねん」

「……別にどうでもええ」

「なんや、不満か」

「不満って、何やの。誰も言うてへん」

「なんか一緒に生きてんなあ、オレら。共に生きる海斗と優里」

はにかんだ笑顔が、いつもの時間に変えていく。

ちょっと違ったその空間の流れが、時折見せるそんな表情にも似ていた。

だから、不安は常に存在していて、そこにあることの意味すら、何気にいるそんな日常でさえも失わないでいられるそんなもののような気がしていた。

「スタバ大好き」

いきなりなそんな言葉も。

海斗の、そんな海斗だけの感覚。

そんな海斗が、今日もアタシの一番だった。

「優里大好き」

スタバと並んだアタシは、どっちつかずの迷える海斗の一番を争うそんな空間にいたりするのかな。

スタバには、ちょっと負けたくないかもしれない。

キャラメルマキアートより、アタシの方が甘いことに気づいてもらえるかな。

「何飲もっかなあ」

鼻歌交じりに、今日も海斗が1日を彩ってくれる。

キャラメルマキアートを飲んでいることが、いつもの海斗との空間でもあったりする。

「マキアートかな、やっぱ」

そして、いつもの空間はやっぱり続く。

お店の中は、空席が3つ並んでいるだけだった。

海斗との始まり。

夜は少し肌寒かった。

6時を過ぎてから風が冷たくて、海斗に「寒い」と訴えた。

「オレ、持ってないよ、そなんん」

何も言っていないのに、海斗は真っ先に答えた。

まるで、アタシがそれを訴えてるみたいだ。

「わかってるよ、そなんん」

「まだ、コートいるんちゃうの？持ってくるやろ、普通」

少し間を置いてから、確かにそうだと納得した。

「今の季節は難しいんやもん。お昼は暑いし、夜は寒いし。なんか、持って歩くのも嫌や」

海斗が少し横目で眺めながら、フッと笑った。

「おまえらしいって言うと思うやろ？オレ、言わへんで」

そんないつもの海斗らしい言葉が、今日も何だか苦しい気持ちになった。

いつもの想って、きっとこんな感じ。

いつも同じだと思えば、何だかちょっと違ってて。

それがいつもありふれた毎日だと言うなら、それが当たり前のように同じ気持ちでもなくて。

だから、海斗のそんな言葉のひとつひとつに揺れ動く毎日があったりする。

夜は寂しいし、朝は待ち遠しくなる。

いつもは、そんな日々の繰り返しなのかもしれない。

「夜景、今日もキレーかなあ」

はにかんだいつもの海斗が、ポケットに両手を突っ込んで、少し体を左右に動かして見せた。

視界は、空の星だったりした。

アタシはポツリと呟く。

「星の方がキレーかもしれんよ」

「星が何やっちゅうねん。オレは夜景を見にきてんねや。雰囲気壊すこと言うなよ、おまえ」

星でもいいと思った。

海斗がいつも空を見ていたから、ただ星がキレイかもしれないと思っただけ。

夜はいつも空を眺めた。

『今日の星は煌めいてるよ』

海斗らしくない、そんな言い方だって納得したかもしれない。

『・・・オレ、何言うてんねやろ』

何も言わないアタシを感じながら、海斗はそんな言葉を口にした。

きっと、そんな気持ちだったんだ。

星はきっと海斗を眺めていた。

だから、いつも思わない海斗だってそう思えたんだろう。

星だって、海斗を強く想う。

もしかしたら、あたしよりももっと深く想っているのかもしれない。

だって、海斗は星をキレイだと言った。

アタシには、到底無理な、そんな言葉だった。

星だって意識したのかもしれない。

だから、あんなに今日も輝いて見えている。

優里には私が映ってる？

そんな、星の微笑が見えたかもしれない。

アタシには、無理だよ。

そんな言葉を、少し苦しみながら訴える。

海斗の無関心な、アタシに対する態度が見えたとしても。

何気に、海斗が口笛を吹いた。

「今日は星よりも、夜景の方が絶対キレーやろな。一緒に写真撮ろや」

アタシよりも女の子らしい言葉を発しながら、海斗は翳りのない笑顔を見せた。

ホッとしたアタシがいた。

笑顔は、その言葉を捉えることもなく一点の曇りもなかった。

「久しぶりの六甲」

そんな理由もない言葉の中で、海斗は少しうつむき加減で笑った。

「何か、飲も」

自販機の前で、海斗が立ち止まった。

明るい蛍光灯の光で、目が少しくらんだ。

「何、飲もうかなあ」

あったかい飲み物が欲しかったけど、アタシは何も言えずにいる。

こんな時、いつも自分を嫌な気持ちとして捉えてしまう。

海斗は、いつも何も言わずに買ってくれる。

いつも、飲むココアだって、今日は少しコーヒーになりたがったりしても。

「コーヒーがいい」

珍しく、今日はアタシが訴える。

自販機の灯りにじっと目をこらしながら、海斗がポツリと呟く。

「おまえはココアでええ」

真剣な顔つきの海斗が、少しいつもより違って見えた。

いつもなら言い返した言葉も、なぜか今は言えないでいる。

時々、そんな海斗を見ることがある。

ふとした瞬間に見せる仕草や言葉の調子が、なぜかアタシを想わせてしまう。

それが、人を愛するということなんだろうか？

少し、それとはまた違うような気がしていた。

想うことと愛することは、違うのかな。

少しわからなかった。

少しわかったような、気がしていた。

手渡されたココアのいつもの熱さに、少し心が震えた。

「初めての味」

缶コーヒーの銘柄をじっと眺めながら、海斗はボソッと呟いた。

アタシは、静かにココアを一口飲み込んだ。

甘い香りは仄かな甘みを包み込んで、寒さには決して負けないアタシを包みこんでくれた。

「紅茶も飲みたい」

ココアを意識しながら呟くアタシもいた。

海斗が笑った。

「ココアを卒業したいの？あかんよ、ココアやろ、おまえ」

「違うよ。ココアなんて飲みたくないわ」

「なんでや。そこまで言うなや」

笑ってる海斗が、なんかいつもより楽しそうに見えた。

そんな気持ちが、少し嬉しかったりもして。

今日は、星に願いを訴える必要もない。

いつも思い悩むそんな願いでさえ、叶えてくれるかもわからない星にさえ、海斗は想いを訴えることはあるのだろうか。

星は今日も瞬いてる。

でも、今日は海斗が見えない分、星は何も言わないでいる。

微笑はそこにあるのだろうか？

アタシには、今の星が見えない。

星は、アタシが見えているのかな。

アタシは、海斗が見えていたりする。

半分ほど埋め尽くされた空き缶入れに、海斗が何気に飲み終えた缶コーヒーの缶を投げ入れた。

ちょうど真ん中あたりで、缶コーヒーの缶は空き缶入れに収まった。

「今日のよき思い出に」

そう言って、海斗がアタシを見て少し笑った。

海斗という空間は、ここに記憶として残ってる。

記憶と共に、そこにもまだ海斗がいるのだろうか。

不安なんていらなうと言った。

海斗が想うそんな空間に、今もアタシがいるように。

散りばめたように光る光景が、まるでアタシの心を覆い尽くしたかのように見えた。

言葉はもうなかった。

海斗がちょうど口にした言葉が、ちょうどそれだったから。

「スゲー……キレーやなあ……」

瞳の中に映った夜景が、海斗の心を映し出しているかのようだった。

「この先って、ほんまにあるの？」

帰る途中、海斗がアタシの言った一言に少し怒りを見せた。

「うざいな」

「海斗はいつも変わらんのかもしれんけど、時々、怖いもん。どっかに行くかもしれんし」

海斗が「マジか……」とあきれ顔で笑った。

「何を見てるんかは知らんけどや、オレ何も考えてないよ。だって、何も考えてないんやろ、オレのこと。信じるとか、知らんからじゃない？オレには、そういうのはちょっとわからんけど、そういうことを考えるんやったら、一生を想う気持ちとしては、オレには優里だけやったよ。今までいろんな人を見てきたかもしれんけど、どれも違ったもん。そういうのって、優里にはわからんやろ。でも、いつかわかるんちゃう？それ、信じたら？」

心は苦しかった。

ホントは、海斗の想いなんて知って当然だった。

だけど、そこに埋める何かが足りなくて。

それが、アタシの心の中だと知った。

不安はどこからくるんだらう。

確かに信じていた。

想いがあるなら、そこには何も無いはずだったのに。

不安は、いつもどこかに存在していた。

いつも想う海斗を、痛む心が変わってしまおうとしていた、そんな小さな苦しみの中で。

いつかは、存在した感情。

いつか、安心した一瞬。

信号が青に変わった時、何も言わなくなったアタシに海斗が呟いた。

「愛がどんなもんか、知ればええわ」

幾つにも重なるテールランプの色が、いつもよりぼやけて見えていた。

海斗を、ずっと見ていたかった。



夏は傷を覆う
溶けかけのアイスと、
グラスの中で揺れる氷のように

花火は悲鳴を上げる
散りゆく仄かな花を散らす線香花火のように
夏はそこに果てを見たのかもしれない

記憶は、
痛みを知らない
きっと、
曖昧な時間を繰り返しながら

目を閉じると、眩しすぎるくらいの光が一筋の灯を思わせるような、そんな懐かしい記憶のように脳裏を巡り始める。

陽射しが眩しすぎるくらいの光を伴って、少し眉をひそめたアタシに向けて、容赦なく照りつける太陽が、まるでどこかにある夏の日を思い起こさせるような、そんな6月初旬の夏の始まり。ケータイからは、いつもの日常と変わらない、何気ない海斗の声が聞こえてきた。

『なあ、何か作りにきてや』

開口一番に言ったその一言に、少しの戸惑いを抱きつつ、アタシは素直に答えてみた。

「でも、あんまりレパートリーないよ」

『知ってるよ。定番でも何でもええから、はよ作りにきて』

「そんなにお腹空いてんの？」

『うん』

「でも、すぐには無理やと思う」

『何、メイクのこと？』

「うん」

『こっちでメイクしたら？』

少しだけ考えて、アタシは一言「うん」とだけ答えた。

『リンのご飯も何か作ってや』

「ネコ缶、切らしてるん？」

『ううん、たまには何か作ってや。ネコ缶だけじゃつまらんやん』

「・・・アタシ、ネコのご飯って作ったことない」

『なんや、おまえ作ったことないの？』

「ネコのご飯って、どんなん？」

『知らん』

「ネコのご飯ってあるの？」

『知らんよ』

ネコ缶以外のご飯について、少し考えてみたくなった。

『何かレシピの一つでも考えといてや。リンにも、たまには違うご飯を食べさせてやって』
少し、悲しくなった。

何かレシピの幾通りでも考えてあげたくなってくる。

そんなに物悲しい気持ちにさせた海斗に対して、少し気分の沈む思いがした。

何も言わなくなったアタシに、海斗が沈黙の理由を聞いてきた。

『なんや、何か意味深な間やな』

「何かな、リンは何が好きかなと思って」

『リンには好きなものなんてないよ。オレの作ったご飯が、リンの好きなものや』

リンが、いつもご飯を待っている姿を思い出した。

チョコンと座ったまま、海斗のそばを離れないリンを見ていて、ホントに海斗の愛情を受けながら育ってるんだなと、素直に実感することが幾度となくあった。

リンは、幸せなんだろうか。

何も言わないリンの表情は、いつも海斗とアタシの心を温めてくれていた。

リンは、無邪気に走り回る性格でもなかった。

ジッと見据えて、何かを考えているかのように、少し首を傾げたり、海斗とアタシの話す言葉にも何か敏感に反応していて、同じ空間で同じひと時をリンも一緒に感じていたりするのかもしれない。

『リンと一緒に待ってるから、はよ来てや』

海斗の言葉に「わかった」と一言答えてから、ケータイを閉じた。

眩しいくらいの陽射しが夏を思わせると言ったけど、もう夏はそこまで来ている。

知らない間に季節は過ぎて、知らない毎日が当たり前のように巡っていった。

今日の何気ない1日にも、何気ない想いが含まれていて。

過ごしていく毎日が、かけがえのない日々の繰り返しだとその夏を巡る景色は、いつもの意識を通り過ぎて、何かを秘めながらそう訴えているかのようだった。

窓の外を眺めてみた。

陽射しが時折、弱くなった時、景色は夏を通り過ぎたかのように、弱い空間を漂った何気ない日々を一瞬忘れてしまったかのような、そんな記憶を残していく。

今、夏を感じてる。

確かに、夏は当たり前のように巡ってきたんだろうけど。

我が子のようなリンを、海斗はいつも可愛がっている。

それを見て、アタシは新しい一面を見せた海斗のそばで微笑んでいたいと願う。

今日も、そんな空間は続いていくような気がして。

それを想うアタシが、今日もここで彩る毎日のためにいろんなことを想う。

陽射しが輝き始めた時、すでに1時間が過ぎていた。

海斗のマンションまで来た時、またケータイの着信音が鳴った。

「もう着くよ」

『ほなええけど』

初夏には珍しくもない、少し涼しい午後の予感がした。

首を傾げたリンが、玄関前で座り込んでいた。

不思議そうな表情が、いつもと変わらない日常を思わせていた。

ニッコリ微笑むと、アタシは思わず一声かけた。

「リン、元気やった？」

「当たり前や」

リンの代わりであるかのように、当然のごとく海斗が答えた。

いつものようにリンを抱き抱えると、海斗が笑顔でリンに話しかける。

「おまえはいつも美人やなあ。さすが、オレの仔」

自画自賛のように、リンに顔を近づけて戯れ始めた。

小さな声で、リンが「ミャ〜」と鳴いた。

「なんや、お腹空いたんちゃうの？はよ作ってもらおや」

そう言うと、海斗がアタシに顔を向けた。

何も言わず、しばらくの間があって、海斗が促すように言った。

「.....なんやねん、はよ作ってや。オレもリンも腹ペコや言うねん。こんなとこまで来て、いきなりポーっとすんなや」

刺々しさのあるような海斗の言葉にも、何だか心地よい空気を感じた。

いつもある風景だった。

だけど、何気ない一言や何気ないいつもの関わりは、決していつもと同じではなかった。

でも、そこにいつもあるその想いはちゃんとそこに存在していて。

いつも感じていられる喜びを、一瞬の出来事でもちゃんと感じることはできた。

リンのあどけない仕草が、海斗とアタシの笑顔につながる。

「ミャ〜」と、またリンが鳴いた。

「唐揚げとオニオンリングとポテトがええ」

すごく億劫になるようなメニューを、サラッとやってきた海斗の気持ちがわからない。

「それやったら、唐揚げだけにして。オニオンリングなんか、作ったことないもん」

「リングにして、揚げたらええだけちゃうの？できるよ。大丈夫、作ってや」

「嘘やろ、めんどいわ」

「おまえ、ムカつくねん。絶対、作っとけよ」

「無理矢理や、やめて」

「何がやねん、作ればええっちゅうねん。はよ、作れよ」

何も言えなかった。

ただ、心は少しの空間を漂っている気がして。

その心を隠すかのように、アタシはただその空間を見ないようにしていた。

「リンは、オレと一緒に遊んでよな」

そう言いながら、ほっぺにリンの顔をくっつけて、リビングに消えていった。

何だか、少しの安らぎを感じていた。

この空間において、彩る毎日が存在するように、今もアタシはここにおいて、海斗やリンと共に過ごしている今を感じていける。

アタシは、確かに海斗やリンと共に生きていて。

そこに、これからの日々を感じていくことができている。

幸せは、いつも感じることはなかった。

だけど、海斗を想う気持ちを意識して、そこに幸せがあることに気付く。

海斗と共に生きていける幸せを、今があることに置き換えて生きるには、少しの不安感がつきまとってしまっただけ。

心からの安心を想うと、共に歩む道に海斗がいてくれて、それが一番の幸せにつながるような気がして。

はっきりとわかる時が、もしかしたらこの先に存在するのかもしれない。

予感、初めて実感につながる。

実感が、すぐそこまでやってきているような気がして。

ため息は、いつも安心にも似る想いで、空間に消えていった。

ため息の存在感なんて、その空間には必要もなかった。

「材料、あるん？」

割と小さな声で言ったつもりが、なんなりと海斗にはちゃんと届いていた。

「うん、あるよ」

「リンのご飯は？」

「うん、オレが作っといたからもうええよ」

そんな海斗の心を、アタシはホントに感じるができるんだらうか。

アタシは、いつも海斗の気持ちをわからないでいる。

不安なんて言えないかもしれない。

ホントは、いつも聞きたい想いがあって。

いつもあるこんな日常では、はっきりと言葉で表現することなんてできない。

ただ、海斗がいてくれるだけで、まだ今はいいのかもしれない。

先なんて、わからない。

だけど、想いをそこまで考えてしまえば、何かがそこで壊れてしまいそうで。

それは、確かにアタシの心だったかもしれない。

抑えた想いなんていない。

だけど、もし海斗がそれ以上に何かを感じてしまえば、すべては海斗のものになってしまうかもしれない。

その怖さは、もしかしたらそこに在るアタシが、ホントの想いを知った時点で海斗を感じていくのかな。

人を想うことの尊さを、海斗は一度言いかけたことがある。

でも、それをまだわからずにいた。

海斗だけを、ただ想う。

それが、今のアタシが感じたすべてだったかもしれない。

手を洗うと、フライパンからパチパチっと跳ねる音が聞こえ、焦げる匂いと共にアタシは慌てて火をとめた。

リンが「ミャ〜」と鳴くと、海斗が大声で笑った。

何気ない空間。

そこに、今のアタシの想いがあった。

幸せは、今という心に響いてる。

海斗の笑顔を見、ただ感じるこのことのできる今が大切だと想えた。

そんな場所に今、アタシたちがいる。

唐揚げの香ばしい香りが、部屋いっぱい広がった頃、時計の針が2時を指そうとしていた。

「できた？」

様子を見に来た海斗が、出来上がり具合を確認しにくる。

仄かに笑顔を見せて、海斗は椅子に腰かけた。

「いただきます」

改まった海斗が、唐揚げを頬張った。

咀嚼を繰り返してから、満足そうに海斗が笑った。

「美味し」

ホッとしたアタシに、海斗は言った。

「今度、パスタ作ってや」

「うん」と頷くと、アタシはオニオンリングを一口かじった。

香ばしいオニオンの香りと、少し焦げ味のついた香りが仄かに漂った。

午後は、陽だまりの空間を作り上げて、アタシたちはいつまでもそこにいた。

リンが、コテンと眠りに落ちた。

あどけないリンを、いつまでも眺めていた。

今は、きつとこんな感じ。

過ぎていくのは、ただ時間に追われることのないアタシたちの過ごす空間だけ。

そこに、確かなアタシたちが、居る。

海斗が、コーヒーを持ってきてくれた。

苦味は、きつと今を覚えてくれる。

そこに、きつと想う日々がある。

「まったり」

笑顔を浮かべて、満足そうに海斗が呟いた。

暑い熱帯夜は、まだやってこない。

夏を想うことがある。

でも、その夜の出来事を暑い夏にしてしまえば、忘れてしまう記憶の方が懐かしくて。

覚えてしまった夏を思い出すと、きっとそこに海斗がいる。

そのことに、何の違和感もないまま、今が過ぎていくことだってある。

でも、きっとそれが今だってことを、ちゃんと実感することで、今の想いがあるような気がして
。

海斗が、フツと笑う。

「もう忘れたわ」

一言の気持ちも、すべてアタシの思い出になったりする。

記憶は、そこに夏を感じていく。

たくさんの気持ちを思い出したのは、きっとそこに何気ない一言があったりするから。

海斗を想った今があって、それを思い出すその瞬間があったり。

そこにアタシがいて、リンもいた夏を、アタシはきっと忘れていかないと思った。

夏の花火を見て思ったこともある。

一緒にいた記憶を夏だと言えるなら、きっと今の記憶を思い出す。

そこにあった海斗の存在と、今が過ぎていく瞬間だと実感できた夏の記憶。

花火が心に訴えるのは、きっと海斗を想えた瞬間を実感できた今があったと言えること。

出会った記憶なんて、もうそこにはないのかもしれない。

そこに必然を伴えば、それが本当の想いだったと言えるのかな。

夏を、彩る花火と共に過ぎた時間を、海斗との思い出につなげたら、そこにかけがえのない未来
を見つけられたのかもしれない。

何気ない毎日は続いていく。

だけど、生きる意味だとか自分の存在の意味を考えた時、そこに必ず海斗があったように、それが
アタシの生きた証だと言えたなら、二人の道がそこにあったと心から伝えることができる。

「たこ焼き食いたい」

夜店が出回る中、ブラブラ歩く二人の前に、列を作ったたこ焼き屋さんを見つける。

少し、面倒な気分だった。

「並ぶん？」

嫌気な感じで言うと、海斗が不機嫌な表情を浮かべた。

「おまえが並ぶんちゃうわ。オレが欲しいだけや」

ポケットから財布を取り出すと、海斗が列に並んだ。

後からついていくと、海斗が周りを眺めながらぼやいた。

「飲み物買ってきてや」

少し面倒。

あまり、こんな場所は好きじゃない。

人混みに紛れた今の気分を、きっと海斗はわかってくれない。

「……何がええ？」

少し腑に落ちない程度に、アタシが尋ねた。

「お茶」

「何でもいい？」

「緑茶やったら何でもええ」

「わかった」

重い足を進ませながら、背に海斗を感じた。

「そこの角のベンチで集合な」

振り返ると、並ぶ海斗の穏やかな表情が何となく目に焼きついた。

あまり、こんな場面は見たことがなくて。

たとえば、屋台に並ぶ海斗はあまり見たことがない。

だけど、そんな場面もあるんだと思えた時、何となくそんな一面も知った記憶のもとに刻まれていきそうで。

それが、夏の記憶だと言えるなら、その初めて見た夏の花火も感じる何かと似ていることもあった。

それが、海斗を思い出すその夏だと言えるなら、同じ時間を過ごした今を実感することだってある。

実感は、常に存在する。

夏は、この街にもいっぱい。

だから、今の記憶が残るのかな。

海斗と共に歩む夏を、じっと過ごす今を感じていけたなら。

どこかで、誰かの笑い声が聞こえる。

楽しい毎日を実感した夏を、あの人もきっと今と言えるこの瞬間に思い出に変えているのだろうか。

そこに、アタシの記憶は刻まれていかない。

あの人の記憶は、きっとこの1日の花火大会で刻まれた中の今があるってことを、その人たちの中で刻んでいったんだろう。

人の記憶に、アタシはどれだけの存在を示すことができたのだろう。

あの人の記憶に残ったアタシがない。

アタシの中に残ったあの人の記憶がある。

それは、アタシが今を感じたその瞬間のものであって。

それが、アタシだけの記憶につながったりする。

そこに、今日の記憶があった。

かけがえのない海斗を想った1日は、きっと想えた時でしかない日々の連続でしかなくて。

出逢いは、その限りある毎日の中に含まれていったんだ。

そこは、きっと同じ記憶を持つ海斗とアタシだけのものであって。

いろんな夏があることの、その存在はきっと夏のつながりにアタシの記憶を思い出す形につながっていこう。

星は、今日もキレイな自分を映し出していた。

ひんやりしたペットボトルのお茶を両手に抱えながらベンチに近づくと、海斗がケータイを片手にメールを打っていた。

座る場所がなくて、目の前で立ち尽くす。

海斗が気付くと、何も言わずまたケータイの画面に視線を移す。

無言は、さほどきつくない。

海斗がいたら、何も感じる事などなくて。

「座れへんの？」

呟く海斗の視線は、何気に隣り合わせた男女を意識した。

「うん……別にええ」

「座りや」

少し隙間を作りながら座り直す海斗の優しさを、窮屈そうな隣り合わせが邪魔をしてるような気がして。

戸惑いは、きっと人混みの渦に巻き込まれていったみたいに。

人を意識する空間では、きっと海斗を想う気持ちは少し違う方向を保った感覚で。

そこで海斗は、きっと何も意識などなかったかもしれない。

人を想うって、何だろう。

心を映す何かは、きっと海斗を想う気持ちにつながらない。

今は、きっとアタシのそんな一面をも、海斗には見えなかったのかもしれない。

座り直す海斗の横で、二人の男女が少し空間を作ってくれた。

一人分だけ、スペースが生まれた。

その気持ちを、少し感慨深げに眺めながら、静かにアタシはベンチに腰を下ろした。

今の気持ちを、人混みに紛れた自分として意識してみる。

そこに、少しの安心感を伴いながら。

ひんやりした手をポーっと眺めていると、海斗が無理やりお茶を取り上げた。

キャップを素早く開けると、爽快に飲みこんでいく。

「何か、食べたいものある？」

海斗が周りを眺めながら、アタシに問いただしてきた。

とっさに言えず、「わからない」と答えると、海斗が笑った。

「そればかり」

屋台に行列を作るお店を、ずっと眺めていると、並ぶ分その美味しさが伝わってくるような気がする。

だけど、そこまで欲しいかと言われると、億劫でしかないその行列が、何だかその気分を損なった今を、やっぱりわからなくしてしまう。

「……なんか、あんまり食べたないな、ここで」

少し、気分が伝わったのかな。

「花火終わったら、どっか食べに行こか」

「うん」

花火のパレードは、儂い記憶に残る術を持たなくて。

そこに海斗がいることに、少しの切なさを抱きながら、その夜を夏に変えた。

「すげーな」

「キレー……」

笑顔をすべてに代えるように、二人の想いがそこにあった。

確かな夏は、今でしかない。

だけど、確かにそこに夏があったことを、二人で感じるができる。

花火のように、そこに二人の時間が終わらないように。

「どんだけの人やねん」

車の中で、一言だけ海斗が呟いた。

ホッとした気分は、きっと海斗も同じだったんだろう。

少しの安らぎをそこに抱くと、安らぎは最大限に引き出されていく。

「……なんや、笑ってんなや」

不可思議に思う海斗の横で、少し気が引き締まる思いがした。

「どこ行くん？」

「内緒」

「食べに行くん？」

「知らんちゅうねん」

「お腹空いた」

「わかってるよ」

アクセルを踏むと、車は静かに動いた。

渋滞は予想をはるかに生まず、どれだけの人がこの花火大会を夢の跡にしていったんだろう。

ゴミがいっぱい散乱していた。

少し、不甲斐ない気持ちがあったことに、海斗も気付いたのだろうか。

「なんか、花火大会によくある風景や」

信号までの道のりが、とても遠く感じた。

見えている景色の中に生まれたものなど、人の多さに勝るものは何も感じることもなく。

早く、あの街に帰って見たかった。

「ミナミで食べる？」

「うん」

「すげー、道のり。うざいな～……」

「渋滞？」

「うん。何か楽しい話してくれる？」

少し、穏やかに言った言葉が、一瞬の想いに変わったこととか。

きっと、海斗に伝わることもなかったりするのかな。

信号の赤が、いろんな車の列に夏の思い出を刻む。

9時を回ると、人はまだ夜を意識することすらなくて。

遊び足りない誰かは、きっとこれからの計画を立て直すだろう。

もう、明日のことを考えて、帰宅を促す人も現れるだろう。

どっちつかずの想いが、その花火大会を色めく何かにつなげていく。

「どっか、遊びにでも行く？」

いろんな想いが、海斗と共に感じるこのことができる今が、すごく好き。

「どこ行くん？」

少し間を置いて、海斗が笑った。

「内緒」

信号を抜けると、少し渋滞が和らいだ。

進む速度が幾分か速くなると、重たい気分は少しの楽しさ変わった。

音楽が少し小さく聞こえる。

エンジン音と共に、揺れ動く車の中は、とても心地のいい空間にあって。

海斗が、鼻歌混じりに口ずさむ。

「パスタかな」

ふいに言葉を口にするのも、いつもの海斗の口癖の一環で。

きっと、いろんなことを考えながら、今があるんだね。

海斗と生きる今を、ちゃんと意識することができる。

今日が、とても幸せだということに、いつ頃気付くことができるんだろう。

夜の中には、小さな空間がいくつもの存在を溶け込ませていった。

そこに、自分がいたことに、少しの安心感を覚えた。

海斗が、口ずさむのをやめた。

夜は、今日も続いていく。

月は、見えなかった。

渋滞をほぼ抜けると、高速道路の景色がいつも見ている感覚に戻っていく。

安らぎは常に存在していて。

そのたびに、海斗を意識してみたり。

こんな空間が、当たり前のように過ぎていくことが、今の海斗との過ごし方だと感じることである。

これが、海斗との過ごし方。

これが、海斗との生き方。

いつもある空間が、海斗のあった毎日であると、いつ認識できるんだろう。

その時を感じることである。

だけど、その時のことを思えば、きっと毎日が過ぎていくことを感じることなくその時があるような気がして。

高速の景色は、いつまでも見ることができたりする？

それが、毎日の景色のように、過ぎていく時間だとか、今の想いがその過ぎていく中にあったんだとか、そんなことを思いながら毎日がその景色につながっていったり。

そこに、海斗がいることに、幸せを感じる日々をいつまでも感じていたい。

それが、海斗との生きる道だと、想っていたいんだ。

「すげー量」

大きなお皿に盛られたパスタを見て、海斗が驚いていた。

別のお皿には、大きめのパンがふたつ並んでいる。

サラダを二つの小皿に分けながら、海斗がまた鼻歌を歌っている。

店内の明るい空間は、少しのお客さんを巻き込んで、彩るテーブルを鮮やかに映し出している。

美味しそうな香りは、そこにくっきりと浮かぶ映像のように鮮明に残っていく。

「うまいな」

一口目のパスタを頬張って、笑顔の海斗が言った。

ゆっくりとフォークを口に運ぶと、クリームの香りが口の中を漂った。

少し笑顔になると、海斗がまた笑った。

「美味しい？」

「うん」

「よかったね」

パンが少し熱すぎて、でもすごく美味しくて。

サラダの冷たさが、何だか心地よくて、海斗がいろんな話をしてくれるたびに、アタシはいつも考えてしまうことになる。

疑問ばかりが、頭を巡る。

「儂いね」

ふと、言った一言。

海斗が何を思ったのか、わからずにいた。

何もなくなったお皿をテーブルの隅に運びながら、海斗は感慨深げに何かを口にした。

「花火って、その夏の気分に似てる」

そんなことを言いながら、海斗はまたひとつ何かを感じていくのかな。

「また、行こうか」

緩やかな笑顔を、いつも感じていたい。

頷くアタシを、海斗はどう感じていくんだろう。

また、ひとつの花火が打ち上げられる。

その時の儂さを、どんな気持ちで感じていくの？

夏は、いつもと違う空間を彩っていく。

きっと、その時の気持ちは、そこでしかない今の気持ちに少し似ている。

それが、海斗の生き方の中に刻まれていくんだね。

「コーヒー飲みたい」

メニュー表を眺めながら、一言口にした。

少し間を置いて、メニュー表を閉じると、海斗が思い出したかのように呟いた。

「スタバ行こ」

安心感は、いつもの場所にあって。

いつまでも、そこはつながるんだね。

歩く街並みも、すごくありふれた生活の中に含まれていて。

何気ない好きなものも、この街にはいっぱい溢れている。

「……マキアートかな」

少し、笑った。

「そればかり」

「それしかないねん、オレ」

「他のもの、飲んでみたらええのに」

「あんま、興味ないねん」

「マキアートしか知らん人みたい」

「うるさいわ、おまえに言われたないっちゃんねん」

笑顔は常にあって、そこに必ず海斗がいる。

そこが海斗の居場所みたいに、彩る毎日の中にアタシもいて。

それが、一番の幸せであるとか、そこに生まれる何かの感情であるとか、何気ない一言の中にいるんな想いが含まれていたり。

そこに、海斗がいる限り、そこに、アタシがいる限り、街並みはいつもの表情を見つめてくれる。

空席が、たった2つしかなかった。

マキアートの甘い香りの中、ほんのり笑顔の海斗が窓の外を眺めている。

少しの安らぎが、そこに存在してみたり。

「夏やなあ……」

夏の1日の終わりに、何を感じるだろう。

街には、何も夏の音など存在しない。

ただ、その感じる声だけなのかな。

きっと、そこに海斗がいるように。

リンが、愛らしい声で鳴いた。

「どうしたん？お腹空いた？」

ほころぶ笑顔を隠す必要もなく、アタシはリンを抱き上げた。

胸の中で、リンが安心したように目を閉じる。

「なんやねん、コイツ」

呟く海斗の視線の先に、アタシの胸の中で眠るリンの姿がある。

「安心ですか」

鼻先をくすぐりながら、海斗がリンを想う。

「海斗の宝？」

少し、間を置いて海斗が笑った。

「知るか、そこまで言えるか、おまえ」

モゾモゾと、リンが体を動かした。

一声鳴くと、海斗が繰り返す。

「眠った時が一番可愛いな、おまえ」

そう言ってリンを抱き抱えると、目を開けたリンに顔を近づける。

海斗の笑顔が、リンの声と共に生きている。

笑顔を失ったことなどなかった。

そこに、リンがいて、そこに、海斗がいて。

当たり前前の光景を、ただ素直に見つめているアタシがいる。

きっと、夏の中心にはきっと当たり前のように海斗の存在があって。

いつもの場所には、きっと変わらないリンがいる。

何気ない毎日の続きは、その何かにつながるいつもの風景につながってる。

想いは、きっとそこにあって。

リンが、じっと見つめる。

笑顔は、常にそこにあったりする。

「曖昧な言葉で言うなよ」

海斗の言葉が、胸を貫いた。

きっと、そこに本当の出来事は存在していくんだ。

何も言えず、アタシはただ頷いていた。

夜はこれから長くて。

寂しくもなかった心が悲鳴を上げるように、海斗のそばでただ沈んでいった。

海斗が言った言葉に、偽りの言葉なんてないと思えていた。

きっと、そこに想いなんてありふれていたし、きっと、未来につなげていく気持ちなんてあって当たり前だと思っていた。

海斗の気持ちを、ただ素直に受けていた。

心は張り裂ける思いでいっぱいだったかもしれない。

だけど、愛することの痛みを、ただひたすら訴えていた時も、ただ無防備に海斗の言葉を受け止めていた時間も、心ではただ悲しみにも似ない、すべての想いにつながっていた。

愛するって、何だろう。

いつも、海斗に尋ねていた。

海斗の笑顔が消えた時、その気持ちがとても苦しくて、ただ無防備はいらないと、常に言葉を求めている。

怖さなんて必要なかった。

そこに海斗がいたらそれでよかったし、そこに同じ時間を過ごす毎日があればそれでよかった。

怖かったのは、海斗が本当の気持ちを口にした時だった。

そこに、すべてを忘れてしまう何かがあった。

海斗だけを見ていれば、それだけで時間を忘れることもできた。

きっと、未来に海斗だけしかなくて。

そこにある想いは、きっと海斗だけ見ている。

『こんなん考えたことない』

ポツリと呟く海斗の横顔を、ただじっと見つめる。

確かに、今は現実として在って、海斗の一言一言が胸を貫く瞬間でもあったりした。

景色なんて、ただ記憶の中にだけあると思えた。

言葉なんて、ただ想いを確かめるだけの方法でしかないと思えていた。

そこに気持ちが在って、海斗を感じる瞬間があった。

『オレには、これ以上の愛なんて必要ないんかも知れん』

空は瞬いている星のように、ただ翳りなどひとつもなくして。

そこに、海斗の想いがあったとしたら、きっと月など見えなかった。

そこから見えたのは、きっと星が輝いたように見せた、ホントの空とは似ても似つかない、そんなおぼろげな夜だったのかもしれない。

「愛することの痛み……」

ひたすら、愛を受けた痛みを、ただアタシは海斗の言葉に求めている。

笑顔を忘れた海斗の痛みは、きっとそこに在るべきものの姿を見失っていたかのように見えていたのかもしれない。

海斗の呟く言葉に、アタシは心の痛みを感じていた。

「痛みなんてないよ。優里が感じたんやったら、オレの気持ちがわかったんかなあ……。オレのほんまの気持ち、知りたいの？」

少し微笑みながら言った海斗の気持ちを、ただアタシは訴えることでしか感じる事ができないでいた。

「よく、わからん」

「わからんって、何やねん。曖昧な言葉で言うなよ」

「曖昧じゃないよ。何を言うたらええん」

「オレを、愛することの気持ち」

「それはまずいわ……」

「なんでやねん」

「だって、言えるわけないよ、アタシが」

「それがええんちゃうの？言うてみいや」

「嘘やろ、嫌や」

「言えや」

「言えんって。も、ええ」

「うるさいわ。おまえが言ってんなよ。心の関わりを知ったんやったら、さっさと言葉にしてみろ」

「……」

「言葉なしか、おまえは。オレが言おか？」

何も言えずにいたら、きっと海斗の本心がわからなくなりそう。

「心の中は、きっと愛でいっぱいやと思う。だけど、心の外ではおまえにしかわからんオレがおるんかな。でも、素直にオレの心を伝えてみたら、きっとそれが優里の中では壊れてしまうかも知れんな。オレの気持ちなんて、絶対知ることなんてないよ、きっと。おまえがほんまに苦しんでも」

最大の苦しみが襲ったかもしれない。

気持ちを素直に口にしていれば、それは苦しみにはならなかったのかな。

「苦しいよ、そんなん」

「その時は言ってや。きっと、苦しまんよ」

そう言って、笑顔は海斗の苦しみを取り除いていった。

そこに、愛を生むものはなくて。

ただ、そこにある心の想いを、誰に訴えたのか。

それが、自分を追いつめていったとしても、そこに海斗がいてくれたら、それでいい。

星が瞬いた夜を知っていた。

月が見えない空を知らないでいた。

ただ、見えてきた愛がそこにあったのかどうかは、たぶん海斗のそばでいたアタシにしかわからなかったのかもしれない。

海斗のそばで、ただ眠っていられたら。

願いは、きっとそこに伝わっていったんだろう。

海斗の中で眠れる日がずっと続いていくことを、この長い夜の間ずっと考えていた。

「ずっと、オレを感じていたらそれでいいよ。心なんて、オレにはわからん。オレが感じたら、それでええ」

そんな限りのない言葉でさえも、アタシにはただ少しの切なさにも似た、そんな気持ちに思えた。

月夜のそんな1日を、曖昧な言葉では表現できない、海斗のそばでただ眠ることを願った日が、ここにあったんだ。

「もう寝るよ、オレ……」

気だるい言葉で、海斗は深い眠りに落ちていった。

月夜に見えるこの夜を、ただ記憶の奥深くにしまい込んでしまえるように。

そこに、海斗とアタシの夜が過ぎていった。

深い眠りは、きっとやってこない。

海斗との眠りが、きっとそこにある現実と伴って、静かに過ごした夏の想いとして、アタシの記憶の中枢に刻まれていくんだね。

そこに、愛は生まれたんだ。

海斗との日々を、ただ包まれたその気持ちと共に。

夜は、ただ小さく震えていた。

ひんやりしたアイスが、少し溶けかけたグラスの中で、めいっばいの想いを甘い香りに代えていた。

一口頬張るその笑顔を見ているような気がしていた。

「溶けてまうな」

海斗の優しさが、こんな暑い中で頑張るアイスの想いを受け止めている。

「美味しい」

「おまえは美味しいだけの毎日か。オレと食べ物と、どっちが大事や」

「.....それ、めっちゃ苦しいんやけど」

「苦しい方がええんやで。だって、オレの愛を一心に受け止められるやろ。オレが愛したるよ」

そう言って、笑顔で微笑む海斗の表情を、少し訝しげに見ていると、海斗がアイスの最後を見届けた。

「永遠に、オレのアイス」

笑ったアタシを横目に、最後の一口で永遠にしてしまったアイスを大事にしているかのように、ただモグモグと口を動かしていく。

「やっぱ、ハーゲンダッツ」

いつもの空間に加わったハーゲンダッツも、今は定番の毎日を海斗とアタシの中で繰り返されている。

「少し、本屋寄ってや。買いたいもん、あんねん」

「ええよ」

夏は、永遠かと思えた。

8月も半ばを過ぎると、もうこの夏がずっと留まり続けているかのような錯覚に陥っている。歩く地面の暑さにうだるような夏を覚えていても、きっと夏はもうすぐ終わっていくんだらう。終わりは、いつか切ない。

でも、また来る日を思わせる。

だから、きっと永遠なんて来ないんだ。

終わりのない永遠なんて、ただ苦しみに変われば、愛を感じる痛みでしかなくなる。

終わることのない永遠は、海斗の中で居場所となれば、それでいい。

想うことの毎日が、いつも永遠であれば、それでいい。

「あち～.....」

歪めた顔と、そんな訴えにも似た海斗の言葉が、少し胸を貫いた。

どこかで見たことのあるような、そんな人との何気ないすれ違いも、今は懐かしい夏の想いに変わっていきそうで。

誰かの笑い声で、海斗が少し緩やかな笑顔を見せた。

「本屋寄ったら、帰るか」

少し寂しさを伴う感情は、何かの終わりを思わせていた。

そんな、夏の日があったような気がした。

いつもの街並みを、好きでいられた。

いつもの街を想わせるこの雰囲気が大好きで、いつもここで過ごすことを願った。

「ミナミは、暑いわ」

そんな呟きも、ざわついた人混みの中に消えていった。

夏は、きつとこんな感じで過ぎていくんだ。

涼しさは、蒸し暑い気温の中には存在しないでした。

きっと、夕涼みとか、夏の終わりに感じる、ただ暑いばかりの夜を意識したりだとか。

そんなことを考えている間にも、真夏を感じることはないまま、毎日ただ暑さに捉われながら過ぎていく。

儂い命に尊い美しさを見る。

薄明な線香花火は、きっと夏を永遠としながらも、そこから儂い命を散らすんだらう。

きっと、そこにあるのは、綺麗すぎただけの夏の思い出。

弱い花の命を、ただ見つめるだけの夢につながるのかな。

命は、どこでつながるんだらう。

アタシは、ただ毎日を海斗のいる世界で過ごす。

そこから続くものを、これから共に歩くための過程だとするのなら、アタシはどんな形でも耐えることさえできたかもしれない。

人を愛することとか、人を想うことだとか。

ホントはまだよくわからないのかもしれない。

海斗の愛した人が、たとえばアタシではなかったら、ホントは知らない海斗がいたのかもしれない。

考えることもできないでいるアタシの心を、海斗は一瞬フツと笑う。

「ほんまのオレは、誰も知らんよ。知ったら、おかしいわ」

そんな海斗の性格も、そんな海斗の考えも、すべてはきっと海斗を愛したからこそわかることができたのかもしれない。

海斗の出逢ってきた人の中で、いったいどれだけの人が海斗を愛したんだらう。

海斗の笑顔を、誰が理解できたんだらう。

アタシは、窮屈な想いの中で、苦しいほどの感情を自分自身で責め立てていた。

「もう、オレ以外は見ることもできんのや。そっか」

そう言って微笑む海斗の笑顔に、苦しみは穏やかな感情の中で小さな想いに変わっていった。

「海斗は、どれだけの人を想ったことがある？」

海斗の目が、じっとアタシを捉えた時、その沈黙の中で生まれた気持ちを少しの安心に変えることもできた。

「あんま、想ったことないよ。感じたことは何回か。でも、ほんまに愛したことのある子は、きっと今の感情の中に芽生えた心の中にあるんかもな」

少し、難しかった。

ただ、愛することのできた人が、世の中に何人いるかなんて、誰もが想像の中で不安と安心の中で考えることだった。

「優里は誰を愛した？」

穏やかな時間を、ただ蝉の鳴き声もしない夕闇の中で、ただ二人だけの世界が止まっていった。

「……海斗の中でしかわからん」

「なんや、わからんな……」

ポツツと呟くと、ソファにもたれて目を閉じる。

リンが暗闇の中で、一声鳴いた。

「ミャ〜」

目の前で立ち尽くすリンの姿が見たくて、アタシは電気を点けた。

明るくなった部屋の中で、ただ目を閉じる海斗が少し眉をひそめる。

「まぶし……」

リンがクリンとした瞳で、アタシを見つめる。

抱き抱えると、リンを胸の中で眠らせてあげた。

「明日の夏祭りさ、リンも連れて行こうか」

そんな暖かい言葉も、すべて海斗の愛情だと感じると、毎日の中の今が、とても嬉しい一瞬に思えた。

夏の終わりに、きっと想う。

夏は、またいつか通り過ぎる一瞬に過ぎないんだ、と。

夏の次を想う。

きっと、もう夏を想うこともないだろう。

蝉と共に、同じ時間は過ぎない。

永遠は、今も留まることを知らずに。

「明日、浴衣着てこいよ」

リンを撫でながら、穏やかに海斗が言った。

そんな、少しの切なさを憂いながら、今日も海斗と共に過ごしている。

胸の中で、リンが眠そうに「ミュ〜……」と鳴いた。

幼かった頃、よく家の近くの夏祭りに出かけた。

必ずと言っていいほど、金魚すくいに挑戦していた。

1匹だって、すくえたことはなかった。

夜店のおじさんが、いつもにこやかに「残念。これを大事にしてね」と言って、金魚を3匹くられた。

楽しみにしていた夏祭りは、いつも何かを残していく。

水風船は3つほど残り、最後は落としてなくす。

金魚は元気に泳ぎまくり、そのためのエサが増えたりする。

金魚は毎年、生きていた頃を忘れたかのように、朝起きてみると、いなくなっていた。

小さなお墓を作って、金魚の居場所を探してあげた。

年々、金魚すくいはしなくなった。

命は、いつもアタシの周りではあまり存在しなくなった。

海斗と一緒にいるようになって、家族が1匹だけ増えたけど、これほど大事に想える存在になるとは思いもしなかった。

夏祭りは儂い。

だけど、残す何かは尊い。

いつか、なくなるかもしれないそんな存在。

それが、いつしか関わることもなくなった。

花火は、いつも打ち上がる。

浴衣姿でうちわをパタパタしながら、みんな目を輝かせて空を見上げる。

星たちは光ることを忘れて、花火の鮮明さに打ちひしがれる。

星は尊い永遠を見失う。

その時の花火は、きっとその一瞬の思い出を鮮明に焼き付ける。

きっと星は見えない。

だから、花火はそこに存在できた。

記憶は、そこに生まれる何かを見たのかもしれない。

隣には、海斗がいた。

リンと共に、花火に見入る姿が、夏の記憶として忘れることのない永遠を思わせた。

リンが怯えていた。

ジッと目を見開いて、花火の情景を見つめている。

一瞬、海斗の胸に顔を埋めては、また花火の開く様を眺めたりしている。

一生懸命な姿を、いろんな角度で眺めてみる。

きっと、リンの生まれた場所には花火など存在しなくて、見たことのないこんな情景を、リンの

記憶の中では鮮明に焼き付けることでしかリンの中では理解できなかったのかな。
きっと、これを花火だとは感じていなかっただろう。
いつか、これが花火だといえる記憶にもならないだろう。
だけど、情景だけは花火だと認識する。
きっと、この日の情景をリンは記憶に留めるだろう。
リンの生きたその一瞬に、この花火があったことを、リンは記憶でちゃんと理解することができるのかな。
「むっちゃキレーや。今の見た？」
ふいに、海斗が笑顔を向けた。
アタシは首を横に振った。
「……なんやねん。大事な瞬間、見逃しやがって」
リンを抱き直すと、リンと何かを話し始めた。
いつもとは違う1日。
いろんな気持ちが巡る。
でも、きっとここにある感情は、すべての想いにつながっていくのかもしれない。
この日を大事だと思えたことが、この先につながっていくのかもしれない。
「ポテト食べたい」
花火が終わると、まばらになった人だかりの中でポツリと海斗が呟いた。
アタシは何も答えなかった。
鼻歌交じりに、リンを片手にトボトボと歩いていく。
夏の記憶は、不自然ささえ感じることもなかった。
ただ、海斗のいる今が、自然を伴う何かにつながっていて。
金魚すくいもなければ、水風船もなかった。
だけど、何かはきっと残っていくだろう今が、どんなものにも勝る何かを思わせる。
「ポテト買ってきて」
財布を手渡されると、アタシは素直にお店の前に並んだ。
空を見上げると、星たちが弱い光を放っていた。
きっと、強く光っていたかった。
星が見えなくなったのは、きっと空に想いを抱くことが少なくなったから。
見えない今を手探りで求めながら、いろんな場所を求めていった。
きっと、空に星があることに気付けないでいた。
星よりも今が大切で、今だからこそ目の前の幸せが必要だった。
星はきっと幸せを見せなくなかったのかもしれない。
鮮明な街の光景は、やがて人をわからなくしてしまう。
人が生きていく中で、ホントに求めていけたのは、その中で生きることではしか見つかることのできなかった大切な想いだったんだ。
何で、人は人を求めるんだろう。

人を愛することが人の幸せだと認めながら、人を愛することに苦しみを抱いたりする。

ホントは、見失いたくない想いでも、きっとどこかでは失う不安を抱いてしまう。

ホントの愛を知ったら、その愛を失うことなんてできなかつたりするのかな。

海斗は、一度だけ言ったことがある。

『あんまり考えたこともないんやけどさ。どこまで人を想えば、本当やって言えるんやろか。感情なんて、ただ感じるだけのものやろうしさ。言うても、伝わりとは限らんやん。なんか、でもそれを言うんやったら、曖昧すぎてまた不安になるか……。でも、まあいつかは言うんちゃうの。こんな、まじめな話の中でさ』

笑顔を絶やさない海斗が好きだった。

ホントは、いつか知りたかった。

いつか、想いがホントだって気付きたかった。

いつも、不安が巡る。

でも、そこにはきっと終わりなんてなかったのかもしれない。

海斗の笑顔を見るだけでよかった。

どの季節にも、海斗を感じていたい。

ベンチに座って、ポテトをかじりながら海斗がひとつため息をついた。

夏の終わりに、何かを想った。

もうすぐ、夏が終わる。

夏祭りが終わったように、華やかさの残るその記憶は夏の終わりと共に、鮮明さを残しながら記憶を留めていく。

そこに、金魚はいなくて。

水風船のように、弾けてなくなるものもない。

ただ、そこに海斗の想いがあった。

リンのあどけない姿があった。

消えることもない、そんな記憶の旋律。

十数人の男女が、何かで騒いでいた。

歩く速度が落ちて、少し落ち着かなかった。

リンを片手に抱き上げていた海斗が、いつもと変わらず鼻歌を歌っていた。

リンが、少し興味を示していた。

手をつないで歩いた。

きっと、ずっとつないでいられる手。

これから、一緒に生きる人。

幸せは、きっと海斗と共に感じていける。

その瞬間を、ずっと感じるままに。

帰る途中の車内で、リンが深い眠りに落ちていった。

胸の中でいつも眠るリンを、今日も抱き抱えてアタシも眠る。

遠のく意識の中で、海斗が少し笑っていた。

「……猫みたい」

聞いていたアルバムが、また最初の曲に戻っていた。

海斗の鼻歌が聞こえなくなった。

目を覚ますと、海斗のマンションに到着していた。

見上げた空には、星がいつもより多く瞬いていた。

きっと、今は何も見失ってはいなかったんだ。

街は、あまり好きじゃないから。

だから、アタシは星が見えたのかな。

きっと、見失いたくない。

人を見失うより、星を見失う方が怖かった。

「はよしいや」

立ち止まることなく、海斗がマンションのエントランスに駆け上がる。

リンがアタシの胸で、少し暴れた。

早く帰りたかったのかな。

急いで、海斗の部屋まで駆け上がった。

エアコンがまだ効いていない部屋で、リンはジッとしていた。

疲れたように寝そべって、また目を閉じた。

もう、夜も深い。

海斗が出してくれたコーヒーを、少し飲んでみると、ミルクの濃い味がした。

「今日はカフェオレ気分」

まったりと、海斗が微笑んだ。

時間は、ゆっくりと過ぎていく。

このまま、時間が止まればいいとさえ思うほど、海斗との今が一番大切だと感じていた。

「なんか、話す？今から」

ゆったりとアタシに向けた言葉に、アタシは素直に頷いた。

「何話すの。なんもないわ」

深夜は、いろんな想いが駆け巡る。

一緒に過ごす海斗が、一瞬わからなくなる時がある。

近くなったり、遠くに感じてみたり。

でも、結局一番の存在だったり。

だから、いつも実感する。

いつも、愛を感じる。

一緒にいて、同じ気持ちで感じ合うことが、一番の確かめ方なんだろうと思う。

今日も、海斗はそばにいる。

愛することの深さを教えてくれる。

いつも、一緒にいる。

そんな、二人でいられたら。

深い眠りに就いた頃、夜の深さは漆黒に近づいた。

リンリンと、夏の夜の音がしていた。

静かな夜を静寂というのなら、闇はそこに存在しなかつたらう。

仄かな輪郭を作りながら、海斗が少し笑った。

おぼろげに光る線香花火の匂いを感じながら、少しの鼓動と共に海斗を感じていた。

夏の終わりは、線香花火に似ている。

きっと、華やかさはなかつたかもしれない。

だけど、憂う心を想ったとしたら、きっと線香花火に痛む心など抱かないでいられたかもしれない。

「夏の思い出は、やっぱ線香花火やね」

クスッと笑うと、アタシは線香花火を見つめた。

仄かな愛を意識してみた。

線香花火の儂い命を、たとえば愛の終わりと感じてみる。

そこに、強さなど存在しない。

だけど、そこに想う強さを感じたかもしれない。

儂さは、尊い弱さを知る。

だけど、本当は終わりなど感じないでいられたかもしれない。

海斗との思い出なんていない。

今を海斗として感じていられたら、それでよかった。

「もう1本」

散った花火の跡を感じながら、薄明かりの中、海斗が次の線香花火に火をつけた。

パチパチと散る花火を、またじっと眺めた。

目に映る線香の火を、ただありのままに見つめた。

「儂いね。どう考えても、オレの想いには似てへんわ」

勢いを増した線香花火を見つめながら、海斗がまた呟いた。

「オレの想いは、どこに打ち上がるんやろ」

フッと笑いながら、また黙す海斗を見つめた。

目の中で、線香花火が散っている。

「.....線香花火って、人の想いに似てる」

アタシの言葉に、海斗が視線を向けた。

「儂いなあ。そんなんいらんよ」

アタシの手の中で、線香花火の火が消えた。

最後を見つめる目は、こんな感じなんだろうか。

「儂さっているの？」

海斗に尋ねられた言葉に、何も答えられないと思った。

いるのかもしれないし、いらぬのかもしれない。

「いらぬよ、そんなん。オレが儂さを知るとしたら、たぶん愛でも何でもないと思うわ。絶対、気付かんところで儂さは散ってるんやろうなあ。オレ、いらぬもん。そんなん」

海斗が知った痛みとか、たとえば想いがあつたなら、そこに儂さは生まれぬと思えた。記憶は、きっと疼くものではないんだ。

「……線香花火で終わる夏って……」

消え入るような呟きの後、海斗が笑みを消した。

「なんか、寂しいな……」

何も言葉は続かぬかった。

ただ、虫の声だけが聞こえていた。

記憶は、ただ痛みにはならずにいる。

きっと、続くこれからも、今の花火にしてみたら、弱い命を見ているただの儂さに過ぎぬいのだらう。

夏を意識したら、きっと必ずそこに笑顔の海斗がいた。

今の海斗を想うスペースを、きっとアタシは作らぬに済んだ。

海斗がひとつため息をついた。

散る最期を見て、またひとつ灯りを灯した。

「……こんな夜も、たまにはええな」

海斗が、少し微笑んだ。

「なんかさ、オレらずっと一緒におるような気がせん？」

「うん」

笑って答えると、海斗が満面の笑みを浮かべた。

「こんな夜も、なかなか」

花火を見つめる夜も、仄かに色づく景色も、笑顔も、想いも、匂いも。

すべて、夏のせいにしていた。

きっと、想いはずっと続く。

こうやって、二人でずっと続く。

夜は、こうして終わって行くんだ。

「エアコン、もっと下げてや」

夏の軌跡をたどると、きっと汗ばむアイスティや溶けかけのアイスだったり、そこにあった夏の音がいっぱい散らばっていた。

蝉は、鳴く場所を見失っただろう。

彩る花の火は、やがて記憶の中に埋もれてしまう。

夜の街を意識して、そこに埋もれる自分を見た気がする。

夏を意識すると、いつもいた街を懐かしく思うだろう。

そこにある様々なざわめきを、彩る毎日に置き換えては海斗を意識した。

いつもの現実、やがて思い出の中に消えていく。

なくしたわけじゃない。

だけど、そこに記憶を収めていくと、本当の意味を見失ってしまうような気がして。

『いつも、オレを感じてればいいよ』

笑顔ともつかない海斗の言葉を、いつもある風景に重ね合わせていた。

そこに海斗がいるように、そこにアタシの記憶があった。

海斗はいつも変わらずに、アタシはいつもそこに在ったように。

リンが、顔をクシャツとして、ひとつくしゃみをした。

海斗が爽快に笑った。

おかしくて、いつまでも笑っていた。

ミルクティーがなくなった頃、海斗が静かに呟いた。

「オレの人生にとって、おまえが一番近い場所におるんかもしれんな」

そんな日を、いつか意識する時がくるんだろうか。

少し、戸惑いを覚えた。

蝉は、もうすぐ鳴く日を失う。

重ね合わせる夏の記憶は、やがて未来をその夏に映し出すことができるだろうか。

きっと、忘れることのないように、アタシの記憶はその夏を現実に変えていくんだろうか。

「.....近い場所」

海斗がアタシを見つめる。

穏やかな時間の経過が、何も聞こえない部屋を鮮明に映し出す。

記憶は、どこに生まれるんだろう。

アタシは、海斗の記憶のどこかにとどまることができるんだろうか。

「おまえにはきっとオレの人生を見れるような余裕もないんやろな。だけど、きっとオレの最後は、おまえが見るんやろか。一緒におるとかさ、一緒に生涯を終えるとか、すべてがおまえのためにあるとか。そんな言葉があるんやったらさ、きっとオレはおまえには言えてない部

分が多すぎなんやと思うわ。絶対、おまえが迷った時、そこにオレがおらんような気がする」
不安は、きっと海斗の言葉を捉える暇もないくらいに、最大限としてそこに存在していたかもしれ
れない。

記憶はそんな部分だけを残していったような気もした。

「……海斗がおらん時？あんまり、考えたことないけど……」

「オレがおった方がええ？」

「うん」

「オレと一緒に将来を考えてみる？」

「うん……」

「やったら、オレのこと、もちよっとわからなあかんかもよ」

少しはにかむと、海斗はソファにもたれかけた。

手に持った缶コーヒーを、小さく動かしている。

リングが、膝の上で少し動いた。

時間は、どこまでを意識できるだろう。

やがて、未来はそこにあるように、それをじっと待つこともできないでいる。

悲しみはないのかもしれない。

そこにある想いを受け止める何か、きっと今は気付けないでいる。

「大事なものって、やっぱ……」

あの頃の海斗の言葉を、何となく思い出していた。

アタシは、素直に海斗の静かな表情を眺めている。

少し海斗が笑う。

「人を愛することなんやろか……」

リングが、膝の上からアタシを見上げた。

頭を撫でながら、アタシがゆっくりと微笑む。

「オレは愛したよ」

リングが安心したように、膝の上に寝そべる。

何も意識したくなかった。

リングが眠るように、ずっとそこで眠っていたかった。

「オレを本気で愛したら、きっとおまえしか見えんやろな。きっとその頃には、オレしか見えん
おまえがおるんかもしれん」

何も言えない理由を、海斗の気持ちに任せていたような気がする。

もうすぐ、月がくっきり姿を現わす。

その頃には、星も瞬く時間を忘れて、じっと想いを収めていくんだらうか。

「海斗の未来に、アタシはおることができる？」

満面の笑みを浮かべて、海斗が笑った。

「おるやろ、そら。オレを愛して止まんやろな」

「何言うてんの」

少し笑うと、海斗がコーヒーを飲み干した。

「オレをもっと知りたい？」

じっと見つめることなんて、この先ほとんどなかったかもしれない。

アタシのすべては、きっと海斗のためにあったのかもしれない。

海斗が、いっばいだった。

リンがいたのを忘れてしまうかのように、海斗がアタシだけを見つめていた。

「……うん」

「じゃあ、オレの未来考えてや。おまえと一緒にいる未来」

「どんな風に？」

「どんな風に……。普通に愛してや」

「もう、愛してるよ」

「ほんまに？どう愛してんの？」

「えっと……」

「何となくちゃうの？まさか」

「でも、海斗もそうなんちゃうの？」

「違うよ、オレは。すっげー深いよ」

「ほんま？」

「うん」

「どんな深さ？」

「言えるわけない」

「……何それ」

「なんや、疑ってんのか」

「絶対信じられん」

「ほんまやで」

「愛してること？」

「うん」

「そしたら、どんだけ愛してる？」

「……なんか、それもどうやろ」

「信じられん……」

「別にかまへんよ、それでも」

少し、不安になったかもしれない。

海斗がすぐに笑った。

手を握る海斗の横で、アタシは少し落ち込んでいた。

「いつか、愛したことの意味知ってみようか」

時間の意識がないまま、ただその流れを感じただけだった。

頷くアタシの横で、海斗がひとつため息をついた。

夏は、もうすぐ終わる。

夜はもうすぐやってくる。

夏の夜を感じるあと少しの時間を、どれだけ数えることができるだろう。

秋の入口には、きっと海斗との初めての時間がまた増えていくだろう。

海斗の笑顔を、どれだけの数重ねていけばアタシに辿ることができるだろう。

きっと、そこに海斗が存在する意味を、愛する言葉に変えてアタシがそこにいるんだろうか。

どれだけ伝えることができるだろう。

どれだけ海斗を意識できるだろう。

愛する時、海斗は何を想うんだろう。

アタシは、何を想うだろう。

愛を知ったら、何に怯えていくのかな。

それを知る気持ちを、また海斗は教えてくれるのかな。

アタシは、海斗をどれだけ想えばいい？

海斗がリンの頭をゆっくりと撫でた。

「オレの中には、優里がいっぱいや」

夏が、きっと笑う。

夏の終わりを意識した。

そこに、海斗がいる記憶と。

夏祭りに感じた海斗との時間を、きっと感じるであろう先に海斗がいる実感が、きっと愛することの意味を教えてくれる。

星が笑ったような気がした。

涼しげな、夏の記憶を消し去った夢のように。

この日をきっと忘れない。

その夏があったことを忘れることがないように、この日をいつか思い出すことができるだろう。

海斗の言葉がアタシを包んだ日。

アタシが海斗を想った日。

人を愛することの意味を、いつかまた知ることができる。

本当の愛を知ったら、本当の海斗が見れるんだろうか。

海斗がアタシを愛した日、きっとアタシは海斗しか見えなくなるだろう。

海斗と一緒に歩むことを、きっと望んだ今日であったことを、海斗はまた笑って答えるんだろうか。

「オレの愛をいつか教えてよ」

いつか、また忘れない夜を迎える。

その時の海斗を、また想うことができるのかな。

夜の漆黒に、海斗の想いは見えなかった。

だけど、そこに海斗がいたから、漆黒には映らない海斗の想いがあったんだろう。

アタシは、その想いを知ってる。

海斗を想う気持ちを知ってる。

いつか、一緒にいる海斗を想うだろう。

握った手を、またいつか思い出すように。

「いつまでも愛してや、オレのこと」

微笑みながら、海斗が呟いた。

「うん」

そう言うと、海斗がアタシの頭を撫でた。

パタンと海斗の腕の中に収まると、海斗の暖かさをずっと感じる事ができた。

時間は止まることがなかった。

ずっと、そこに海斗の想いを感じる事ができた。

いつ、時間は止まるだろう。

その時がきたら、伝えたい。

海斗の想いが重なるように、時間はその気持ちを包んだように。

きっと、一緒に生きるのかもしれない。

そこに、アタシがいるように、そこに、海斗がいる理由として。

願いは、きっと海斗につながる。

「オレと一緒にいようや」

呟く想いのように、心を貫く気持ちは最大限だったように思う。

頷く暇もないまま、海斗の胸の中で抑える気持ちを知った。

夏の終わりは、きっと感じることもないまま過ぎるんだろう。

いつか、また夏がやってくる。

海斗の胸で感じるままに、その夏もまた海斗の中で想えていくのかな。

リンの鳴き声と、海斗の想いと、すべてはアタシの記憶の中に在った夏の思い出。

夏に知った海斗の想いを、アタシの少しの痛みに変えてしまった今日を感じた。

感じるままに想えた海斗との時間は、鼓動の疼く痛みに変えてしまった愛の意味になる。

海斗といた理由が本当の愛だと知ったら、きっと壊れるほどに海斗を愛してしまうのかもしれない。

海斗の胸で痛みを知った。

だけど、きっともっと海斗を知りたくなるだろう。

その時、海斗はまたアタシを想ってくれるんだろうか。

アタシはきっと、また海斗を想うだろう。

「オレ以外、見るなよ」

夏はきっと痛みしか残らないのかな。

頷く鼓動のように、アタシは海斗のすべてを知る予感がした。

夏は、こうやって終わりを知ったのかもしれない。

痛みは、きっと海斗を感じたのかもしれない。

夜は、ずっと続くんだ。

こんな、鼓動ばかりの夏の夜を思いながら。



人がいて
風景があって
そこに、オレはいた

いつも時間は流れて行って
そこにいつもあったものは
すべてが自分にとって
かけがえのないものだった
見失うこともあったし
失ったものも多かった
大切なものを守ることさえもできなくて

自分の弱さに気付いた頃
そこにあるすべてのものを忘れないでいようと思った

いつか、わかる時がくる
自分は今、何を感じていくんだろう
自分は今、どこにいるんだろう

大切な人は、今もまだそこにいる
きっと、ずっとそこにいる

refrain.

「ミヤ〜」

目を覚ますと、リンが顔を覗かせていた。

眠い目をこすりながら、少し笑みを浮かべて伸びをした。

「……なんや、お腹空いたんか？」

リンを胸の上で抱き抱えると、また目を閉じた。

モゾモゾと、リンが少し暴れた。

時計を見ると、まだ7時を少し過ぎた頃だった。

そろそろ、起きる時刻だ。

昨日買ったばかりのヘアカタログを手にとると、さっそくページを開いた。

いつもお店で見る雑誌を、ふと思い出す。

そろそろ、買い替えの時期だった。

日曜日の朝は、少し気分がよかった。

明日が休みとなると、少しやる気が湧いた。

火曜日と水曜日は、特別に休みをもらった。

優里と久しぶりに旅行の計画を立てている。

都会っ子のフリをして、東京へ向かうつもりだ。

何年ぶりだろう。

仕事やプライベートに追われて、大都会の喧騒を忘れていた。

ミナミはあまりにも身近すぎて、当たり前のように毎日は過ぎていたし、いずれミナミを去る時が来たとしても、優里がそこにいたら、別にミナミを離れてもいいと思えていた。

優里は、ミナミが好きだと言った。

東京は、あまりにも優里をわからなくしてしまうかもしれない。

バスルームを出ると、TVからはいつものキャスターが笑顔で天気予報を告げていた。

リンのご飯をラグの上に置くと、ケータイを手にとった。

電話の向こうでは、少し眠そうな瑛太の声が聞こえる。

「まだ寝てんの？」

「……もう起きるよ」

「……8時過ぎてんねんけど。おまえ遅刻するよ、マジで」

「わかってるって。昨日いろいろあってさ、あんま眠ってないねん」

「まあ知らんけどさ、今日来る前に、お店の雑誌買ってきてや」

「……めんどいな。どうしても、オレ？」

「めんどいって何やねん。頼んどくで」

「……まあ、ええけどさ。今日、飲みに行かん？」

「うん、ええよ」

瑛太が、ひとつため息をついた。

「毎日、変わらん」

「……なんや、朝っぱらから。そんな話、もうええって。その時、聞くからさ。ほな、またあとでな」

電話の向こうで、眠そうにアクビをしながら、瑛太が電話を切った。

相変わらず、思う。

毎日の変化に、いつも求める何かを人は考えながら生きるのかな、と。

瑛太の一言は、その誰もが感じるその一瞬の想いだったのかもしれない。

毎日は、そうやって何気なく過ぎていくんだろう。

そこに何かがあるか。

幸せは、きっとその先に見えてくるものを感じた時に実感するんだろう。

それを仕事に見たこともあるし、優里に重ね合わせた時もある。

大切な何かって言えば、オレは何も言えなかった。

優里がいつも想うものを、オレは少し笑いながら毎日考えてしまっているのかもしれない。

だけど、もしかしたらそんなことも、いつかは自分にとっての疑問として残っていくのかもしれない。

リンが、TVの前で座っていた。

キャスターの笑顔を見ながら、リンが少し首をかしげた。

9月の初旬、まだ残暑は厳しくて、秋の予感は何気ない想いの中にあるような気がした。

マンションを出ると、優里からのメールを返信してから、車のエンジンをかけた。

LOVE FAKE.

「紅茶、切れてる」

スタッフルームの中で支度をしていると、テーブルの上で紅茶パックの整理をしていた仁が手を止めてしばらく考えていた。

「マジで？1つも？」

「あと3つある」

「……マジかよ。買ってこいよ」

「オレが？」

「いや、オレ行けんもん。予約いっぱいもん」

「マジか……オレ、行くの？……うっとうしい～、オレも忙しいねんで」

仁が上着を手に取りながら、眉をひそめて帽子をかぶった。

見たことのない、新しい黒の中折れハットだった。

「行ってらっしゃい」

笑顔で見送ると、仁が少しはにかんで手を挙げた。

「20分で帰ってこいよ」

「無理や」

ドアが閉まると、しばらくスタッフルームの中はシンとした雰囲気変わった。

あと、10分で開店する。

スタッフはみんな、もう店内に移動していた。

指輪を親指に付け替えると、スタッフルームを後にした。

「なあ」

タオルをたたんでいると、背後から誰かがオレを呼んだ。

振り返ると、彰吾がシャンプーの入れ替えをしながら、少し笑みをこぼしていた。

「なんや」

「彩花の話、聞きたくない？」

「……ええ、別に」

タオルをたたみ終わると、彰吾の背後を通り過ぎながら、少し笑って声をかけた。

「オレの話、聞く？」

「いや、ええわ」

「なんや、オレの話が絶対おもしろいと思うわ」

開店と共に、2名の客が入ってきた。

手を洗いながら、ふと優里を思い出した。

明日の準備に忙しいと、朝のメールで訴えていた。

楽しみにしている優里の顔を思い出して、少し笑みを浮かべた。

明日から、小さな旅の始まりだ。

journey 1 days. 日常からの解放

ケータイから鳴り響く音楽で、もう朝がやってきたことに少しの不快感と共に気付いた。

ケータイを手にとって音楽を止めると、ゆっくりと目を開けた。

薄明かりの中、シンとした空気が漂っている。

リンが、横でスヤスヤと眠っている。

月曜日の朝は、オレにとってはとても気分が安らぐ空間だった。

休む間もなく、また仕事が出ていたりする日常を、ただ疲れを癒すだけの月曜日にしてしまえば、それはそれで何となく落ち着かないでいたりもした。

月曜日は、たいてい優里と過ごしていた。

1日中、一緒に眠ることもあった。

優里の寝顔を、ただ見ていたりもした。

心を安らぎに変えてしまえば、それは優里という空間が変わってしまったり、優里のただ眠る姿がそこにあればそれでいいとさえ思えたことに、自分の想いがどれだけのものなのかを知ってしまったりもした。

優里の知らないオレの一面も、すべてをこれからのものにしてしまえば、きっといつかは優里もその意味に気付くのかもかもしれない。

顔をバシャバシャと洗うと、タオルで顔を押さえた。

タオルで口元を覆いながら、鏡に映る自分の姿を眺めた。

起きたての表情に、いつもの疲れが浮かんでいるように思えた。

ひとつのため息でさえ、自分の日常に忙しい何かを見つけたような気がして、毎日は時間の過ぎ去ることの速さに気付いていけない今があるような気もした。

ホッとする時間は、日常の過ぎる速さを忘れてしまえる休息の地として思い起こさせるように、毎日を優里と過ごす日常に置き換えることができたなら、きっと時間は時を止めるように、いろんな何かを感じながら生きることができるのかもかもしれない。

コーヒーメーカーから漂う香りに誘われるように、オレはキッチンに向かった。

寝起きのリンが、足元で一声鳴いた。

抱き抱えると、ジッとするリンと一緒にキッチンでコーヒーを淹れるカップの様子を眺めていた。

黒い波紋が、漂う香りと連動するように、朝の空気を彩っていた。

リンが「ミャ〜」と鳴くと、オレはリンに顔を近づけた。

とぼけたリンの顔をマジマジと見つめてみると、本当にオレの仔のように思えて仕方がなかった。

「.....おまえは、ほんまにオレの仔でよかったな」

少し笑うと、少し暴れるリンをまた抱き抱えた。

ソファーに座っていると、優里からメールが届いた。

ケータイ画面を見つめるオレの前では、毎日をただ同じことのように繰り返すキャストの笑顔が今日もリンに微笑みかけている。

ジッと座ってその姿を見つめるリンのいつもの光景に、少し笑顔を浮かべた。

”何時に迎えにきてくれる？”

ぼんやり考え込んでから、おもむろに返信した。

”8時前くらい”

すぐに着信音が鳴って、優里からの”了解”の文字を見ると同時に、オレは素早くケータイを閉じた。

今日から、3日間の旅が始まる。

旅行は、案外久しぶりかもしれない。

もし、自由がずっと続いたら、きっと毎日のように優里と一緒にいろんな場所を訪れたかもしれない。

そんな少しの夢を抱えながら、毎日はまたすり減るように過ぎていく。

ずっと続く日々を、何となく疲れが覆った自分の心と一緒に、その何気ない日常がいつまで続くのかと、少しの思いで考えていた日もある。

何をもって生きるか。

先を見れば、少し曖昧さを感じてしまえた。

その中に、本当の自分の道があるようにも思えた。

そこに、今ではわからない先の本当の自分があるような気もしていた。

そのオレは、幸せでいるのだろうか。

優里と一緒にいるオレを、少し想像してみた。

だけど、やっぱり曖昧すぎて、不安はどこかに押しやられたように感じていたし、だからと言って本当は安心した毎日ではないことに気付いてもいた。

優里の存在を意識する毎日に変わってきたことに、曖昧な毎日をもしかしたら明確な今として感じるものがずっと続いてくれるかもしれない。

何を感じていけるんだろう。

将来の不安を意識することなく、今までやってきた。

そこに、優里もいて。

ここに、オレがいて。

将来は、二人の時間があって。

そこに、本当の幸せがあるのかもしれない。

夢はいつまでも続く空想のように、現実には曖昧なほど幻想にも近かった。

軽快な速度で、景色が動いていた。

車内に溢れるBGMが、肌寒い季節を新鮮な気持ちにさせていた。

秋は、何となく忘れた頃を感じることもある。

朝の聡明な感覚と、秋の季節を感じるこの瞬間と、優里と過ごす今という現実。

明確になったその景色と、想いというものがこの瞬間にあるとしたなら、そこに優里がいるということが一番の今を感じる瞬間なんだろうと思う。

鼻歌を歌いながら、少し穏やかな表情を浮かべる優里を、きっとこの先ずっと想い続けることになるんだろう。

穏やかな優里を、ずっと見ていたいと思った。

車外を眺めると、流れる景色の向こうに、大きな雲が3つ浮かんでいた。

夏に見た入道雲とはかけ離れた、少し薄い雲。

前に、同じ雲を見たことがある。

空はいつも通りの澄んだ色で、雲は純白のように澄んだ白色だった。

雲になりたいと、一瞬願った。

あの頃のオレにとっては、毎日がただ流れるように過ぎていくようなもので。

大切なものや何を想いに変えるとか、そんな問題も抱える暇もなく、ただがむしゃらに仕事に身を任せていた。

誰かを求めることもあった。

その時に感じるものは、いつもありふれた生活の中でしかわからない人たちばかりで。

日々は、常に何のために過ぎていくのか、誰と過ごしていけば今の自分を理解してくれるのか。

そんな自分の問題にも、誰もが触れることもなく、ただ想った人を感じることもあまりなかった。

ただ、いるだけの存在。

そんなものじゃなかった。

ホントに知っていきたいものや感じていく気持ちは、確かに理解しながらじゃなかったかもしれない。

想いはそれだけだったことに、漠然とした悲しみに変えてしまった時もある。

何がホントの愛だったか、わかった方ではなかったかもしれない。

今感じるすべては、今いる優里があつてのオレだった。

感じたことが、今の想いであることに、まだ優里には言っていない。

「何時間ぐらいで着くやる？」

優里が楽しそうに笑った。

「そんなに楽しみ？」

「うん」

優里が楽しそうにしているのを、あまり見たことがなかった。

少し笑うと、車のエンジンを切った。

「109に行きたいよなあ」

オレの言葉に、車から降りようとしていた優里が穏やかに笑った。

「うん、行ったことないけど」

「病みつきやな、たぶん。オシャレにも敏感になってさ」

「いつも見てるものとはちょっと違うかな、やっぱり」

「お嬢になれや」

「嫌やわ。あたしはお姫になりたい」

「何言うてんねん。オレとおったら、お嬢になれつつうねん。姫系はおまえには無理やろ」

車から降りると、肌寒い秋の匂いを感じた。

カツカツとブーツを鳴らしながら、後をついてくる優里がポツリと呟いた。

「……今日、ほんまに109行くん？」

「うん、行く」

「何買おうかな……」

「楽しみ？」

「ショーパンが欲しい」

「知らんわ」

少し笑うと、優里も少し笑った。

いつもの会話も、少しの笑顔も、これからの毎日も。

今日があったことに、何気なく気付くことがあるんだろうか。

旅の始まりは、いつもこんな穏やかな気持ちから始まる。

優里とを感じるすべてを、今日も感じていけるんだろう。

空港内は、搭乗時刻を待つ人ばかりでいっぱいだった。

優里が、あまり空港を利用したことがないと言った。

これで、2回目らしかった。

30分ほど時間があったので、コーヒーを飲みに行った。

いつもと違う優理を感じると、少し穏やかな気分でいられた。

もうすぐ、またひとつの思い出が生まれるんだろうか。

楽しいことは、常にオレの周りには存在していて。

そのすべてが、優里と歩むその一瞬になりかけていた。

空港を出てから、もう1時間ほど過ぎていた。

東京の空気は、大阪よりもまだ幾分か鮮明であるかのように感じた。

見慣れたミナミも、やがては夢を見たその瞬間に、自分のいる場所ではないように思えてくるんじゃないのかと、少しばかりの不安に駆られたりするのも、毎日の過ごしてきた風景にそろそろ旅立ちを意識してみたりする頃の、あの進むべき道を選んだ時に感じた何かに似ていた。

旅立ちを意識するものなのか。

誰もがそれを思うことだってあるのだろうか。

仁は、確かに笑った。

『俺にはわからんわ、おまえのそういう考え。ここが好きや言うてたんちゃうの？まあでも、俺もあんま、ここにおりたいとは思わんけどな』

いつも、ビジュアル意識な仁が、帽子をかぶり直しながら鏡に映った自分の姿をチェックしていた。

『……自分大好きやな、おまえは』

『ほっとけや』

何年後かに何かがあるとしたら、それは今もあり続ける毎日がそこにあるかどうかだった。

日常は、今でしかないのかもしれない。

目の前の椅子に腰かけていた彰吾が、少し笑いながら話し出した。

『オレ、結婚してるかも。最近、彩花がうるさいねん。おまえ、そろそろやろって言われても、オレにはまだわかるかちゅうねん。なんで、結婚やねん。おまえ、飛びすぎやろ』

リアルすぎるそんな話にも、オレはただおもしろくて笑うしかなかった。

彩花にしてみれば、本気で将来を意識していたのかもしれないのに、彰吾の考えに至ると、それはまだ将来にもなっていない今があるみたいだった。

『おまえ、彰吾やろ？』

『何やねん』

『結婚するんやろ？それでいいのかなって思って』

『おまえ、うざいねん。結婚、結婚、うるっさいわ。ほっとけ』

『うっとうしいな、おまえ。勝手に結婚しとけよ』

『ちょっと待て。オレ、彩花やないで。今やもん、楽しいのは。将来なんて考えたことないわ。ま、実際はさ、今から考えることが、彩花との未来なんかどうかはわからんねんな。もっとあるねん、たぶん。おまえ、最初から結婚って……オレが苦しいっちゅうねん』

瑛太に笑われた彰吾が、少しおかしく思えた。

『結婚か……』

オレの言葉に彰吾は何も答えず、瑛太と少し会話の花を咲かせていた。

ミナミに慣れ親しんだ人は、あまりそこから出たいとは思わないでいるのかもしれない。

オレが感じる日々は、もしかしたらもうそこにはないのかもしれない。

大好きな街が、オレの生まれ育った街だというのなら、大好きな人と生きていく街は、もっと広がった場所に在ってほしかった。

そんな人が現れることを待ち望んでいたこともあった。

優里は、あまりそこまでオレを信じてはいないのかもしれない。

言ったこともない。

まだ、言うつもりもない。

不安な優里の顔を見るたびに、オレは少し落ち着いた何かを見てしまう時があった。

まだ知らない優里の横顔を見ては、安心の中にその想いを埋めておきたかった。

ペットボトルのお茶を一口飲むと、瑛太がオレに話しかけてきた。

『どっか行くの？』

いきなりな言葉に、少し意味がわからなくて、戸惑った。

『なにが？』

『ちゃうよ、将来とかさ、言うてるから。ここに残らへんのやろ？』

何か、少しリアルな話になりそうで、戸惑い気味なオレは曖昧な言葉で濁すしかなかった。

『わからんよ。将来は曖昧すぎてさ』

『決まらんな、おまえ。もっと、カッコええ言葉ないの？』

『あったら、こんなところにおらんわ』

『優里と結婚すんの？』

少し間を置いてから、オレは笑った。

『するよ、どっかで』

『マジで？優里やったんや、おまえ』

濁した何かとは裏腹に、曖昧な言葉は何かに押し潰されたかのように、鮮明な想いは瑛太に何かを悟らせてしまった。

『こっちにおったらええのに』

『.....オレ、どこ行くねん』

『いや、なんかおるような気がせんねん。なんかさ、おまえって.....いきなり、おらんよな、やっぱり。ちょっと寂しいな』

『なんや、それ』

少し寂しい感じを捉えながら、緑茶の入ったペットボトルのキャップを空けた。

優里との未来があるから、そこに寂しさはなかった。

瑛太の将来は、きっといつまでもこの街にあるのかもしれない。

どこにいても、きっと帰ってくれば、瑛太がそこにいる。

瑛太は、いつも何かでは呟いていた。

今であることの実感や想いは、きっと今でしかないこの一瞬に過ぎなかったのかもしれない。

呟いた一言で、オレは瑛太の本心を知ることができていたのかもしれない。

『……毎日、過ぎるの早いな』

少し物思いにふけるかのような、そんな瑛太の一言に紛らわす言葉などなく、オレはそれに考えを抱くこともなかった。

毎日は、ただ当たり前のように過ぎていた。

瑛太がいた。

彰吾がいた。

仁がいた。

優里がいた。

オレがいた。

毎日があった。

今があった。

これからを意識すれば、そこに当たり前の日常があって、これから先が未来だと言うのなら、たぶんそこに優里があつての未来があるんだと、瑛太によって実感させられたのかもしれない。

『さ、仕事仕事』

開店前のゆったりとした雰囲気は、少し慌ただしい流れの中で時間と共にかき消されていった。

この今は、ずっとあるのだろうか。

不安じゃなく、想いじゃなく、ただすべてをなくしたくなかった。

現実って何だろう。

生きていくことで、何かを失うことが現実をなくす何かに似ているようで、現実の伴う日々の中では本当の気持ちを伝えていきたくなかった。

ただ、どこかで本心を言ったのかもしれない。

だから、今の瞬間があるのかもしれない。

笑った瑛太が、なぜか鮮明に見えた。

記憶は、どこまで鮮明でいられるか。

瑛太は、ずっといるような気がした。

優里を想う、何かとは少し違って見えた。

「109行くん？」

風が少し生温かくて、気分が滅入りそうな予感がした。

「行かん」

「なんで？」

間を置いた会話の中で、優里が何かを理解したかのような素振りを見せていた。

「……ま、どこでもええけど」

少し間の抜けた感があった。

楽しい旅行なのに、何かがそこに見え隠れしていて、気分の滅入るその理由を優里は何も尋ねてくることもなかった。

「お腹空いた。なんか食べに行こ」

少し透明感のある東京の街並みに、オレらは懸命に溶け込んでいた。

歩く速度や密度の濃い風景は、何か楽しい気持ちを覆い隠してしまったかのように、新鮮な街並みは不安を覚えさせた。

「食べたら、渋谷行こ」

オレの言葉に、少し優里が笑った。

「うん」

少し違う今日の1日も、二人でいると、何気ない毎日の、いつもと変わらないあの感覚に似ているような気がした。

ベーグル店の中では、まばらに空いた席が数個並んでいた。

香ばしいコーヒーの香りが、店内に広がっていた。

優里が微笑んだ。

少し笑うと、オレは席についた。

「コーヒー解禁日やな」

「うん」

二人だけの今は、まだ実感しないでおこう。

いつもいる実感より、これからの二人の実感の方がまだ大切なような気がした。

暑い1日の始まりは、こんな遠い地から始まっていた。

夜は、どこにいても同じだった。

でも、どこかでは少し違っていて。

いつもと違う雰囲気空気が、いつも以上に自分を感じとることができていた。

夜の星には違う静けさを感じたし、月に違いを見るぐらいなら散らばった街の景色を見る方が、まだ星に近いと感じてしまっていた。

大きな窓から見えるのは、最上階から見えるその街の景色よりも、空に近いその場所から見える星や月に穏やかさを見る方がまだ自分に合っていると感じていた。

TVからは、いつもと同じ番組が流れている。

いつもとは少し違う感覚で、その画面を眺めていた。

ソファに座る優里と、少しの安らぎを感じながらTVから流れるバラエティ番組を、ただ笑うでもなくボーっと見つめ続けた。

優里が、少しだけ笑った。

グラスに注がれたジュースが、氷の溶け切らない様を映し出ししながら、少し揺らめいた。

優里の飲んだグラスに、紫色の波紋が広がる。

広い部屋の中には、ただTVの音と自分たちの作り出した物音だけが響き渡った。

東京は、何だかすべてが静かだと感じた。

喧騒しか残らない、いつもの夜とは少し違っていた。

ペットボトルのジンジャーエールを飲み干すと、キャップを閉めずにテーブルの上に置いた。

優里が大きなあくびをした。

ソファの隅に置いてあるカゴの中からは、スースーとリンの寝息が聞こえてくる。

優里がそれを見て、少し笑った。

「眠いな……」

ボソッと呟くと、オレは眠いのをこらえて、ただ目を細めた。

画面から、いつもと変わりのないCM音が流れてくる。

目を閉じると、少し睡魔が襲った。

深い眠りに陥りそうな感覚に襲われながら、優里の言葉を耳にした。

「なんか、ちょっと疲れてる？」

「・……なんで？」

「口数少ないもん」

「それだけか」

「眠るの？」

「あかんの？」

「ええけど……」

目を開けると、優里の視線の中に自分が映っているのを感じた。

「なんか、ちょっとちゃうよな、いつもとさ」

「うん」

「なかなか新鮮な感じで」

ニコリと笑うと、珍しく優里は笑わなかった。

「……なんやねん」

「何もないけど」

「何か考えてんの？」

「ううん、何も」

「意味ないの？」

「うん」

「何か考えろよ」

「いいよ」

そう言いながら、勘弁してと優里は笑った。

「東京もいいよなあ、たまにはさ」

少しおぼろげに物思いにふけりながら、オレは天井を見上げた。

何も言わない優里の横顔には、何も気持ちなど入っていないように感じた。

「ミナミから離れてみてどう？」

優里が少し微笑んだ。

「どうやろ……少し、気分転換になったかもしれん」

「楽しい？」

「うん」

「これから、ずっと楽しい毎日にしよか？」

「うん」

「一緒ってさ、どんな感覚？」

一呼吸置いてから、優里が少し不思議そうに答えた。

「わからん」

「何も感じんの？」

「うん」

「おまえ、ムカつくわ。ちょっとは何か考えろや」

無言のまま、優里は少し真剣に考え始めた。

夜は、何だかやっぱり静かに過ぎていた。

グラスには、薄くなった紫色の波が、仄かに明るい部屋の情景と重なって、いつもより二人の影が濃く映し出されているように感じていた。

「もしさ」

オレの言葉は、どんな風にして優里に届いているだろうか。

「オレと一緒におれんってなったら、優里はどうすんの？」

一瞬の間を置いて、不安そうに優里が言葉を続けた。

「なんで？」

「いやいや、もしもの話」

「……」

少し不安定になった優里の横顔に、何だかいつもの安心感を見せてあげられない今があるように思えた。

「たとえば、さ。オレがさ、一緒にいたいのが優里や言うても、ほんまかどうかなんてわからんのちゃう？今は優里でしかないけどさ、この先に優里がほんまにオレと同じ道を歩いてるかどうかなんて、わからんかもしれんやろ。一緒におる気持ちって、どうなんやろか」

何もつながらない今があるのかもしれない。

優里の次の言葉なんて、あるとも思えないでいた。

なのに、なぜか今がその一瞬を知ってしまわなければいけない衝動にかられた。

「愛するって、なんやろな」

自分の言葉だけが、部屋の広がりを作っていた。

どこまでも、自分の想いだけが続いていくような気がした。

優里の静かな気持ちは、どこまでいってもどこかではつながらないような気もした。

「一緒におることさ。すべてがわかったとしたら、オレはたぶんそれだけで愛することになるんやと思うわ。それ以上もそれ以下もないと思う。たぶん、それがそのすべてになるんやろな」
不安げな、影を見たような気がした。

こんな場面では、いつも優里は何も言わない。

オレの、何気ない自分空間で言えた言葉を、すべて理解しなければいけない優里の想いなど、ただ同じ道だからこそ許されるそんな場面ではないと思えて仕方なかった。

「優里は、オレにとっての、そんな人になるんやろか」

ただ、緩やかに過ごす毎日を、ただありふれた毎日として過ごしてきた優里にとって、こんな気持ちを抱くことなど、これからの人生において、どれだけ感じることができるだろう。

オレにとっての人生。

優里のかけがえのない人生。

オレにとっての優里の存在。

一言は、まだ放たれることもない。

ただ、想いは静かに留まることもない。

「一緒ってどんなの？」

ただ無言のまま、優里はじっとオレを見据えていた。

「オレと同じ気持ちなんやろか」

「……」

「同じやったとしたら、考えることだってできるよ。一緒におることの意味とか、気持ちとか、そんな全部」

どんな意味なのかを知ってしまわなければいけないかのような、そんな悩みにも似た表情を、優

里はその顔に浮かべた。

「言えよ」

「何が？」

「今の気持ち」

「わからん」

「ムカつくなあ。それぐらい考えろっつうねん。言えたら、オレも愛せるよ」

苦しむ優里の中で、少し穏やかな気持ちが見え隠れした。

いつもとは少し雰囲気の違い、そんな二人の間に、いつもとは全く違う想いが芽生えていた。

苦しみにも似た、想いの中で芽生える感情。

二人の中では、同じ想いと言えるものを実感しながら生きていく気持ちを、ただその瞬間でしかない想いには似ない、本当の意思がつながりかけていたその想いを感じることができたのかもしれない。

「言いたくない」

「何がや」

「そんなの考えたこともないし」

「言えよ」

「言いたくない」

「うっとうしいな、おまえ」

オレが少し不機嫌になると、優里は不安感をずっと抱いたままそこにしようとしていた。

同じ気持ちってどんなものだろうか。

オレの想いと、優里の想いが少し食い違って見えるのは、ただまだ少しだけ優里の想いにはない心があるのかもしれない。

オレの気持ちに素直に答える優里の姿やその想いを知ることは、オレにとってはとてもかけがえのない想いを抱くその瞬間にあった。

感情は何のためにあるんだろう。

想いはただ続くためだけにあるんだろうか。

笑顔を失うと、急に優里の朗らかな表情が霞んで見えた。

うつむいた仕草と、いつもと変わらない優里の笑顔。

オレの気持ちなど、何もわかってはいなかった。

優里が笑顔を消した。

視線のどこかに、オレがいたように感じた。

ただ、そこに揺らめく影が見えた。

漆黒は、ただそこにあるだけに過ぎなかった。

光は、二人の間で揺れ動いて消えた。

月は、静かに笑った。

星は、瞬かないまま、ただ静かに微笑んだ。

漆黒の夜は、二人の未来を変えたのかもしれない。

未来は、二人の本当の道を知っていたのかもしれない。

journey 2 days.

朝のレストランは、少し透き通った空気を思わせた。

あまり、朝に強くない優里にも、何かを思わせたのかもしれない。

「美味しそう」

ニッコリと微笑むと、バイキングレストランでずらりといくつも並ぶ料理を物珍しそうに眺めた。

「そんな珍しいか？」

オレが少しおもしろそうに笑うと、「そんなことはないけど」と、少し恥ずかしそうに笑った。

「めっちゃ出来上がってんな」

そんな言葉が出るくらい、レストランのカウンターに並べられた豊富なバイキング料理のすべてが、その彩られた雰囲気、そのすべてとしてレストランを彩っているように感じた。

スクランブルエッグにしたってフワフワ感が絶妙で、ウィンナーの焼き具合もまるでお手本のような焼き色がついていたり、サラダのトッピングやドレッシングの種類は、どこにも負けないぐらいの豊富さであったり、ドリンクの種類にしたって、コーヒー党には選ぶ権利を与えてくれたり、ジュース向きな傾向の強い人には、種類は様々で、健康第一、美味しさ十分の、どの分にしたって満足感の得られる、そんな朝食風景が望めるような気がした。

「ねえ、なんか考えてんの？」

パンを2個お皿に並べて、優里がオレに問いかけた。

「なんも。スープってこれだけかなと思って」

コンソメとコーンの2種類しかないのを見て、優里が何度か頷いた。

「少ないね」

コーンスープをスープ皿に入れると、何も考えることなく席に向かった。

スプーンを手に取ると、席につこうとしている優里に向かって、何気なく問いかけた。

「昨日、寝たの？」

オレンジジュースを口に含みながら、優里が少し間を置いてから答えた。

「うん、3時間ぐらい」

何度か頷くと、優里の何かを言いたげな表情を感じた。

「なんや」

「.....昨日、寝てた？」

「うん」

「なんか、眠った形跡ないような気がする・・・」

「.....寝てたからやろ、おまえが」

オレがそう言うと、優里は何も言わずにスクランブルエッグを口に入れた。

甘いスクランブルエッグの香りは、きっとオレの好きな味に一番似ていたかもしれない。

優里の作るスクランブルエッグは、甘い砂糖とミルクの多い、初めて作った時のあの感じをいつも思い出しては、どこかのお店で作ってくれたスクランブルエッグと比べては、そのたびに優里のスクランブルエッグに軍配を上げていた。

オレの、密かな優里びいきだった。

ふと微笑んだ優里の笑顔に、今考えていた思考と重ね合わせて、一瞬の間だけ現実感を失ったかのように、オレの想った瞬間が優里とオレだけの世界に見えた。

優里は、いつオレを意識し始めたんだろう。

オレの中に、優里は自然なままに存在していた。

そこに在るのが現実としてあるように、その姿が優里であるように、オレはその優里のすべてを愛した瞬間だった。

気付いているだろうか。

優里が、いつかオレだけにすべてを委ねてくれる瞬間があるのなら、オレはいつかきっと優里を愛したことにすべてのオレを感じる姿がそこにあるような気がしていた。

たぶん、その瞬間はどのすべてをも見失うぐらい、人を愛したことを訴えるのだろうか。

現実には、きっとそこにあって。

未来はきっと、優里と共に歩いていくような気がする。

いつ、それに気付くだろうか。

まだ、何かを不安げに見つめる優里の表情を、オレはまた何かを理解したかのように生きていくのだろうか。

優里の笑顔は、いつか安心に変わる瞬間があるだろう。

その時に、オレのすべてを知るのなら、人を愛したことの本当の姿を見るのかもしれない。

出逢いはいくつも存在していて、そこから生まれるのはきっとどこかにつながるかもしれない絆の証明に過ぎない。

きっと誰かは孤独を訴えていて、いつかはどこかで結ばれることを願いながら毎日を過ごしていたりする。

そこにあるのは、そこから生まれることなどなかった想いや結ばれることへの喜びを、どこかでは現実としてそこにあるように、いつかは誰かを愛することを望みながら生きることで、生きることの意味や喜びとしてあるその想いも、誰かのためにあることに気付くからこそ、自分の生きた姿を想う誰かがいる。

優里はどれだけの絆を超えて、オレに辿り着いたのだろう。

存在は、誰もがいつもある姿でいるのだろう。

そこに、オレは在ったのだろうか。

優里のいた空間には、オレの姿がなかった。

そこに在ったいくつかの絆は、優里をどこまで知ったのだろうか。

オレにとって、絆はまだ辿り着かない幻想に似ていた。

そこに、オレがいたのかがわからないまま、優里が愛していたいくつかの証明の中に存在していた。

いつかは、わかるのだろうか。
オレがいた理由や、オレという時間の必要性。

生きるとか。
生きないとか。
愛されたとか。
孤独があったとか。

それは、誰かがきっと感じていたことだった。
そこに優里の姿を見出すことはなかったし、これからもその姿を見ることもないだろう。
愛を乞うとか言ったら、誰かはきっと笑うだろうし。
想いが伝わったから人を愛したとか言えば、誰かはきっと本気の意味を見失っただろう。

『愛なんて、どこにでもあるさ。
きっと未来なんて、どうってことないだろうよ。
オレがいれば、誰かはいるよ。
いれば、誰かはオレを愛すだろうしさ。
どこかにいれば、きっと誰かを愛してあげることだってあるだろうよ。
きっとさ。
どっかにいるんだろ。
本当に、オレが愛してあげられる運命の人とかさ。
.....でもさ。
愛されることの意味って、本当はどこで知ることになったんだろうね。
愛することが、本当は難しかったりするのかもしれないよ。
誰のために、オレはいるんだろうね。
オレはいるんだよ、確かにね。
でも、誰かはきっと愛を見ないでいるんだろ。
だから、愛なんてあるかないかの証になってしまうんじゃないの？
オレは、愛したことなんてないけどさ。
.....けどさ。
もし、オレにホントの気持ちがあるんだとしたら、さ。
きっと、もう未来を見てしまってるかもね。
だって、ホントに存在したんだろ。
オレの愛を見た人がさ。
だから、もういいんだよ。
オレは、誰かと歩むからさ。』

いつか、わかるよ。

理由とか、存在とか、生きた道とか、今とか。』

どっかで、誰かが想ったことは、きっと自分にも想えたことだった。

オレにとっては、もう何も言えなかつたりした。

感じることのすべては、優里を愛することのすべてだった。

オレンジジュースの中で、氷がカランと音を立てて動いた。

何も知らないまま、優里はコーンスープの最後を口に含んでいた。

空が、少しいつもより薄く感じた。

朝の匂いはいつもと変わらずそこにあったのに、何かが変わったような気がしていた。

どこかで、きっと気付いただろう、1日の記憶。

暑い午後を思わせた、9月の風は。
一瞬、いつかを思い起こしたかのように、二人の間を駆け巡った。
冬はきっとやってくる。
それまでの間の、曖昧な感触。
ブラウンカラーを彩るには、まだまだ鮮明に記憶は残っていた。

優里がひとつ咳をした。
ニット帽を深くかぶった視線からは、歩いている人波の多さには気付かず、ただこんな流れなど消えてしまえばいいと感じていただけだった。
静かな喧騒。
いつもある風景には、いつもの笑い声があった。
そこにいたのは、いつも見たことのある顔ぶればかりで。
その街から出ることの意思を、ただ憂いとさえ感じていけるなら、そこにあったのは無防備に未来を見据えることもできないほど、まだまだ先の見えない自分の幼さの残る葛藤だけで。
そこには、自分の意思なんてホントはなかったのかもしれない。
通ったのは、確かに自分の未来だった。
確かに在ったのは、自分の生きた今にすぎなかった。
毎日は、いつもと変わりなく過ぎていて。
そこには、いつもの日常でしかない今があって。
幸せはきっと、そこに存在していたことに気付かずに。
おぼろげに、どこかできっと気付いていたりした。
どこかで、オレは幸せの未来を意識していた。

優里の笑顔が好きだった。
いつもと変わらない笑顔の合間に見る安らぎは、きっとどこかにある幸せの中にあると信じていた。
幸せは、優里にとってどんな未来を予測できただろう。
きっと、オレとは違っているのかもしれない。
オレといる未来と、今ある現実感の中にある幸せ。
どちらが、優里のホントの幸せなんだろう。
きっと、どちらにもオレは存在していただろうし、どちらにも優里のホントの幸せがあったのだろう。

ニット帽は、まだ少し早かったのかもしれない。

一度、脱いだニット帽をまた浅めにかぶると、優里が何か問いかけてきた。

曖昧に濁すと、少し沈黙があった。

心地よさは、たぶんオレだけだったのかもしれない。

手をつなぐいつもの感触に、少しだけ近くに感じた距離感を幸せだと豪語するには、まだ少し大人には程遠い何かを感じていた。

幸せは、きつとこんな近くにあったのかもしれない。

それに気付いたような、そんな小さな幸せの瞬間だった。

大きな紙袋を2つ持って、優里が少しおもしろそうに笑った。

オレのいつもの気だるい雰囲気を見て、優里はまたそれを口にした。

「.....機嫌悪そう」

何も感じはしなかったけど、いつもあるそんな会話の片隅に、やっぱりいつもは感じない安らぎがあったりした。

「なんか、コーラ飲みたい」

「.....珍しい。コーヒーかと思った」

「コーラ日和やろ、今日は」

「そうかな」

「炭酸飲めるの、おまえ？」

「.....何言うてんの？飲めるよ、それぐらい」

「喉痛いとか言うてんちゃうの？おまえやったら」

「喉より、なんか胃痛めそう.....」

「なあ、炭酸ってさ、美容にええの？」

少し無言になると、優里は静かに答えた。

「.....知らん」

「えっ、おまえ知らんの？お肌ピカピカちゅう話やで。知らんの、マジで？」

「知らんよ。炭酸あんま好きちゃうし」

「知っとけよ、それぐらい」

何も言わずに、通り過ぎる人波の中で、2人の距離感を測りながら、いつもある2人の幸せを感じていた。

空には、大きな雲が3つ浮かんでいた。

澄み渡る大空を見たのは、何日ぶりだろう。

あまり、空を仰ぎ見たことのないオレにとって、こんな大きな街の中で見るその風景は、眺めるその場所を感じる間もないままに、そこに在ることの実感を何となく日常生活のそれと同じぐらいに感じる今を意識しながら、これが現実だと言い聞かせるようにして、実感は何気なく過ぎたその瞬間を捉えたりしていた。

「ジャスミンティー、あるかな？」

「美味しいの？」

「うん、花の香りっぽい」

「そら、そうやろうけどさ。美味しいか？」

「それやったら、コーラよりマシやわ」

「コーラをバカにすんなよ」

「知らんよ」

笑顔は、どんなものよりも尊いものだと、誰かがどこかで言ってたっけ。

それを、どこかではきっと思い出していた。

そんな場所に、いつものオレの日常が在ったような気がした。

自販機の前で、ジャスミンティーを探してみた。

一番端っくに、ピンク色に彩られたペットボトルのジャスミンティーを見つけると、優里は少し微笑んだ。

「嬉しいの？」

「うん」

「幸せやな、おまえは」

「そうかな」

そんなことを言いながら、たったそれだけの出来事だけで微笑む優里を見ながら、幸せはどこにでもあると実感していた。

2人の間には、幸せが在って当たり前だと、いつかどこかで思ったことがある。

でも、きっとそれは何もない日常の中にある2人の歪みがないのが当たり前で、もしかしたらそんな未来があったとしても、2人なら信じ合える何かを持っていけるかもしれないと、オレなりに信じていた。

冷たい感触が喉元を通ると、少し大きなため息をついた。

疲れは、繰り返される日常生活の中で当然のようについて回った。

でも、きっと疲れを見せないのが自分であって、それを感じさせない周囲の雰囲気も、また疲れな何かを持っていて、楽しい毎日の中で過ぎる時間の速さに少しの戸惑いもないままに、気付けば優里と同じ時間を過ごしていた。

きっと、どこかで安らぎはあった。

誰かはきっと言っていた気がする。

『オールで遊ぼや』

みんな、笑っていた。

笑顔はいつもそこにあって、在るのが当たり前で。

日常は、なくならない永遠を思わせることもあった。

楽しい日々を繰り返すことで、少しずつ何かがわかり始めたりしたこともある。

誰かもきっと同じことを感じていただろう。

でも、やっぱり同じ毎日は顔を合わせるたびに感じる倦怠感と少し似ていて。

何かあるとすれば、それは変化のある瞬間であってほしいと願っていた。

幸せの言葉は、誰が先に口にするだろう。

どこかにはある先を見るために、きっとその瞬間はあるように感じていた。

だから、毎日はあるのだろうか。

そんなまだわからない答えを巡らせながら、毎日を今も続けていたんだ。

journey 3 days. 風景

寒い日は来るだろうか。

雪は本当に降るのだろうか。

毎日はそんな夢を見るでもない日々を巡らせて。

ただ、日々なんてそんな見慣れた笑顔たちとを感じるその一瞬で。

そこに在るのは当たり前だった。

そこからつながるのは、きっとどこかでは変化する一瞬を捉えてみたい自分が在って。

誰かは、必ず変化を求めている。

そこに変わらない日常を見据えることしかできなくて。

誰かはきっと泣いたりしていたんだろうか。

そこにはきっと希望さえも生むことができない自分がいて。

傷ついたなんて言いたがりな自分を、ただ気だるく笑っている自分自身がいたりした。

希望は、いつ頃生まれただろう。

きっと、そこには希望すら生まれえないなんて言うては自分を偽り、本当は楽しかったことを隠してまで希望を持たない自分を演じていたりした。

そんな自分を嘲笑気味に笑った頃には、同じ気持ちを感じるままに生きていた仲間がそこで笑っていた。

『お店作ってみたい、とか？』

いつもとは違う帽子を目深にかぶった仁が、深くソファに腰を下ろし、眠そうな顔をして笑った。

『でっかいなあ、おまえ。そんな夢語ってんなよ』

『将来の夢とか言うてんねんやろ？オレも夢ぐらい見るわ』

『.....おまえが言うたら、なんか夢やなくなるような気がするな.....』

『おまえ.....今さら、夢ってなんやねん』

『言うてもないやろ』

『おまえには絶対に教えんからな』

笑顔でそう話した仁を見ながら、毎日はそんな会話を実は幸せに感じていたりしたことも。

日常は、日々の繰り返しからくるいろんな感情があることも。

仁には、あまり感じていなかったことだって。

少しの新鮮さを感じながら、いつもとは少し違った一面を知った時の感じ方も。

毎日は、そんな幸せでもない、そんな一瞬だって仲間がいたことによって、自分の毎日が形作られていることに、少しの幸せを感じたりもしていた。

『何年後かは知らんけどさ』

タオルをたたみながら、仁はポツリと呟いた。

『もし、オレに夢があったとしたら、それがオレやったって言ってみたい気もする』

シャワーの熱さも忘れて、オレも少し考えた。

外の景色は、まだ暑さも知らない、まだのどかな花の季節だった。

オレにはまだ、夢はない。

帰りの車中で、疲れ切った優里が寝息を立てて、隣の席で寝ていた。

リンのクリンとした瞳は、太陽光の反射で映る車窓からの景色を、ただジッと捉えるばかりだった。

「ミャ〜」

眠ることを知らないリンの横顔を垣間見る隙もないまま、運転に集中するオレの心を、少しばかり安らぎに変える一瞬だった。

午後4時の喧騒もないまま、心地よい温度を保ったまま、車中にはいろんな景色と音と、そして二人と一匹だけの幸せな空間が漂っていた。

幸せは、こんな感じだった。

ただ、時間は過ぎていくだけでもない。

ただ、何もない空間でもない。

二人にとっての時間は、きっとこうやって過ぎていくんだろう。

何気ない瞬間が、オレは好きだった。

何気ないこの時間が、オレにとっての幸せでもあった。

いつか、また違う幸せが待ってる。

自分にとって、今の幸せは二人が出逢った時に感じた時の、あの瞬間にも似ているような気がしていた。

毎日は、変化の繰り返し。

変わらないのは、続いていく想いと、いつかはきっと感じるができるだろう。

何も意識しないまま、オレは運転を続けていた。

鼻歌は、誰にも聞かれないまま、オレの心に染み渡っていった。

『あちー……』

外から帰ってきたばかりの、彰吾の歪んだ顔を見ながら、オレのランチタイムが始まった。

『なあなあ、夏休みってさ、いつからとれんの？』

近くのコンビニから買ってきたコカコーラを勢いよく開けると、彰吾は少しワクワクしながら返事を待っていた。

アツアツのカルボナーラパスタを口に含むと、オレは少し笑みを浮かべながら答えてやった。

『末あたりちゃうの？知らんけど』

『……テキトーやなあ、おまえ……』

『なんや、そんなに待ち遠しいの？なんで？』

笑うそばから、彰吾が少しはやる気持ちを抑えつつ、身を乗り出して話し出した。

『ちょっとばかし、オレらの時間も必要かな〜……なんて思っただけや。たまには、二人の時間

も必要やろ。毎日、しんどいっちゅうねん。いつ、休めんねん。なげ〜・・・』

少し、焦燥感にも似るような思いで、彰吾が一言呟いた。

『……リアルやなあ。大丈夫か？疲れきってんなあ』

口の中がパスタでいっぱいになる頃、彰吾がサンドイッチを頬張りながら、ポソッと言葉を発した。

『たま〜に、しんどい』

みんなに笑われる彰吾を見るたびに、いつもこんな瞬間がいいと思う一瞬でもあった。

何もない午後。

何もない毎日。

ただ、流れるだけの毎日。

毎日の同じ時間を、ただいろんな想いで過ごしていだけ。

彰吾の毎日には、オレがいるんだろうし。

オレの毎日にとって、彰吾の今はただ在って当たり前前の存在だった。

誰かは、いつもそこにいて。

誰かはきっと、いつかいなくなるような気がしていて。

でもきっと、ずっとそばにいてることを感じていたりもしていて。

10年後も、同じ未来は続いていると、そう信じる自分を、ただ感じるだけの毎日。

一人だけの空間は、在ったりした。

でも、どこかにはきっと誰かはいてくれた。

仕事帰りの暗がりだとか、夜ばかりを見ていた頃もあったり、シンとした静けさに安らぎを感じたりもして、また違う一瞬には寂しさを想ったり。

誰かに、メールを送った。

返信メールがおもしろくて、一人歩く道中で楽しく笑っていた。

”今から、飲みに行こや”

楽しい気分が続くことが当たり前で、何気に過ぎた今の一瞬も、何も感じないまま通り過ぎようとしていた。

”ええよ。30分後に”

”ラジャ”

いろんな毎日がある。

いろんな人がいる。

いろんな時間があって、そんな毎日は生きたその証でもあるのだと、少し語ってしまった夜のことだとか。

誰かがきっと笑って、誰かはきっとどこかで泣いていた。

そばにいてくれて、よかった。

いつか、言いたかった。

でも、まだ言えないでいた。

いつも、そばにいた日々。

いつも、続いていくと信じていたあの日。

オレは、笑顔が大好きだった。

days.

お土産を机の上に広げて、オレは少し満足げに笑った。

「3種類達成」

何事かと、みんなが机の周りに群がると、物珍しげにお土産を眺めた。

「なんや、東京？」

「楽しそうやなあ、おまえ」

「全部、食べ物かい」

「食べてもええの？」

「おお、ええよ」

「おいしそー」

「味わえ」

豪語したオレの言葉も虚しく、いろいろな人たちの言葉と笑顔に包まれて、思い出的一幕はこんな場面にもあると気付いた一瞬でもあった。

「おもしろかったの？旅行」

モグモグと口を動かしながら、瑛太が尋ねてきた。

「うん、楽しかったよ。思い出いっぱい」

「オレも行きたい」

少し羨ましげに、瑛太は微笑んだ。

「たまにはええ」

「誰か、おらんかなあ……」

最後の一口を口の中へほうり込むと、美味しそうに口を動かした。

何の記念日でもない、今日の出来事。

いつも、何か思っていたりする。

みんなが大好きで、この仕事が好きで、この街が好きで、いつもの時間がとても大切に。

いつも、そこにいてほしい。

いつも、そこにあってほしい。

毎日は、そんな一瞬でもあった。

また、何か話し合おう。

いつでも。

どこでも。

いつも、そこにある。

そんな、毎日。

メールが届いていた。

”お疲れ様。昨日は楽しかったね”

微笑むなんて、いつものことに過ぎなくて。

安心は、どことなく当たり前でしかない瞬間。

返信メールを返す頃、みんなの声が遠くの方で小さくなっていた。

「お疲れ」

大きな声で別れの言葉を口にすると、みんながいっせいに手を挙げた。

「よく寝ろよー」

瑛太の、いつもの気だるい声が耳に心地よくて、少し笑ってしまった。

シンとした夜道に、自分の足音が木霊している。

寂しい夜は、いつも一人でしかないと知っていた。

誰かもきっと同じ瞬間に、寂しさを想っていたりするのだろうか。

”眠れた？”

1分と経たないうちに、優里からの返信が届いた。

”うん。ぐっすり”

”そう、また行こうね”

”うん”

”今から、逢おうか”

季節にしてはまだ少し肌寒い風が、身体をすり抜けていった。

静寂な夜の間を、聞き慣れた音楽が流れた。

”うん、いいよ”

”すぐ、迎えに行く”

次のメールが届く前に、オレは優里の家に向かった。

いつも、流れた景色。

いつも、通り慣れた街。

音楽は、いつも同じで。

幸せは、当然のように過ぎていった。

また、優里に逢える。

いつも、同じ空間を共にした人。

毎日は、今もずっと続いている。

+++おわり+++



海斗とアタシと、ミナミの中心街。／七瀬 佑衣 -nanase yui-



感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46551>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46551>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.